

平安京右京五条三坊十四町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇〇六―七

平安京右京五条三坊十四町跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京五条三坊十四町跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたびマンション建設に伴う平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

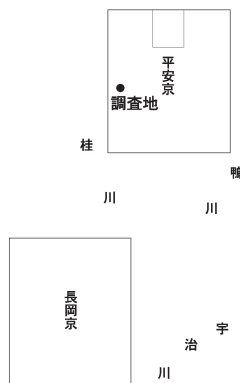
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 18 年 8 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|---|
| 1 遺 跡 名 | 平安京右京五条三坊十四町跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市右京区西院日照町 112 番 |
| 3 委 託 者 | 株式会社 穴吹工務店 代表取締役 穴吹英隆 |
| 4 調査期間 | 2006 年 4 月 3 日～ 2006 年 6 月 16 日 |
| 5 調査面積 | 768 m ² |
| 6 調査担当者 | 木下保明・西森正晃 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「西京極」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 遺構番号 | 現場で付けた番号を使用し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 13 遺物番号 | 図版順に通し番号を付し、写真の番号も同一とした。 |
| 14 掲載写真 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 15 遺物復元 | 村上 勉・出水みゆき |
| 16 基準点測量 | 宮原健吾 |
| 17 本書作成 | 木下保明・西森正晃 |
| 18 編集・調整 | 中村 敦・児玉光世・近藤章子・山口 眞 |



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と周辺の調査	1
3. 遺 構	8
(1) 基本層序と遺構の概要	8
(2) 弥生・古墳時代の遺構	8
(3) 平安時代の遺構	20
(4) 鎌倉・室町時代の遺構	24
4. 遺 物	25
(1) 遺物の概要	25
(2) 弥生・古墳時代の土器	25
(3) 平安時代の土器	28
(4) 鎌倉・室町時代の土器	31
(5) 石器・石製品	32
(6) 金属製品	34
5. ま と め	35

図 版 目 次

図版 1	遺 構	1	調査区全景 [弥生・古墳時代] (北東から)
		2	調査区中央部全景 [弥生・古墳時代] (北東から)
図版 2	遺 構	1	方形周溝墓 1 (北東から)
		2	方形周溝墓 2 (北東から)
図版 3	遺 構	1	土壇 168 (北東から)
		2	方形周溝墓 1 遺物出土状況 (東から)
		3	方形周溝墓 3 遺物出土状況 (北から)
		4	方形周溝墓 4 遺物出土状況 (東から)
図版 4	遺 構	1	建物 1 (北西から)
		2	土壇 36 (南から)
図版 5	遺 構	1	調査区東半部全景 [平安時代] (東から)

	2	調査区西半部全景 [平安時代] (北東から)
図版6	遺構	1 建物2・3 (東から)
		2 溝80 (東から)
		3 溝92 (北から)
図版7	遺構	1 井戸118 (北から)
		2 調査区全景 [室町時代] (東から)
図版8	遺物	弥生土器
図版9	遺物	土器類・金属製品

挿 図 目 次

図1	調査前全景 (東から)	1
図2	調査風景	1
図3	調査区配置図 (1:1,000)	2
図4	調査位置図および周辺調査 (1:6,000)	2
図5	北壁断面図 (1:100)	9
図6	西壁断面図 (1:100)	10
図7	弥生・古墳時代遺構平面図 (1:300)	11
図8	方形周溝墓1実測図 (平面図1:80、断面図1:40)	12
図9	方形周溝墓2実測図 (平面図1:100、断面図1:40)	13
図10	方形周溝墓3・4・6実測図 (平面図1:80、断面図1:40)	14
図11	方形周溝墓4遺物出土状況 (1:20)	15
図12	方形周溝墓5実測図 (平面図1:80、断面図1:40)	15
図13	溝116実測図 (平面図1:80、断面図1:40)	16
図14	土壙119・121・168・174実測図 (1:40)	17
図15	土壙36実測図 (1:40)	18
図16	建物1実測図 (1:80)	18
図17	平安時代遺構平面図 (1:300)	19
図18	建物2実測図 (1:80)	20
図19	建物3～5・柵6実測図 (1:80)	21
図20	溝80・92実測図 (平面図1:200、断面図1:40)	22

図 21	井戸 118 実測図 (1 : 40)	22
図 22	室町時代遺構平面図 (1 : 300)	23
図 23	出土土器実測図 [弥生時代] 1 (1 : 4)	26
図 24	出土土器実測図 [弥生時代] 2 (1 : 4)	28
図 25	出土土器実測図 [古墳時代] (1 : 4)	28
図 26	出土土器実測図 [平安時代] (1 : 4)	29
図 27	出土土器実測図 [鎌倉・室町時代] (1 : 4)	31
図 28	石器・石製品実測図 (1 : 2、1 : 4)	33
図 29	石器・石製品	34
図 30	金属製品実測図・銭貨拓影 (1 : 2)	34
図 31	平安京直前の京都盆地地形図 (1 : 60,000)	36
図 32	調査地周辺の旧地形復元図 (1 : 6,000)	37

表 目 次

表 1	周辺調査一覧表	3
表 2	遺構概要表	8
表 3	遺物概要表	25

平安京右京五条三坊十四町跡

1. 調査経過

本調査は、株式会社 穴吹工務店によるマンション建設に伴うものである。調査地点は、京都市右京区西院日照町 112 番である。調査に先立ち京都市文化市民局文化財保護課による試掘調査が行われ、敷地の大部分は既存建物の基礎によって遺構面が破壊されていることがわかった。ただ駐車場であった部分は遺構が良好に遺存していることが判明したため、(財)京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を行うことになった。調査は 2006 年 4 月 3 日より開始した。

始めに、重機による表土剥ぎを行った。その結果、鎌倉・室町時代の耕作跡を面的に確認した。続けて下層の検出を行った。その際、検出した遺構に埋土の違いが見られたため、方位などを検討しながら調査を行った。結果、平安時代の条坊遺構や宅地内の建物などを確認した。その後、重複した残りの遺構を調査したところ、弥生時代の方形周溝墓や古墳時代の建物が確認できた。平安京以前の遺構を良好に確認したことから、6 月 8 日に記者発表を行い、10 日に現地説明会を開催し、広く市民への普及に努めた。

2. 位置と周辺の調査

今回の調査地点は、平安京右京五条三坊十四町の南西隅にあたり、1 町内を区分する「四行八門制」では、「東三・四行、北七・八門」の 4 戸主分に該当する。鎌倉時代に作成された『拾芥抄』収録の「西京図」では、平安時代後期には周辺部一帯とともに「小泉荘」となっている。また、調査地周辺には、西院遺跡や西京極遺跡といった平安京遷都以前の弥生時代から奈良時代にかけての遺跡が周知されている。

十四町内の発掘調査は今回が初めてとなるが、周辺では多くの立会・試掘・発掘調査が行われている(図 4、表 1)。中でも大型ショッピングセンターの建設に伴う大規模な発掘調査が六条三



図 1 調査前全景(東から)



図 2 調査風景

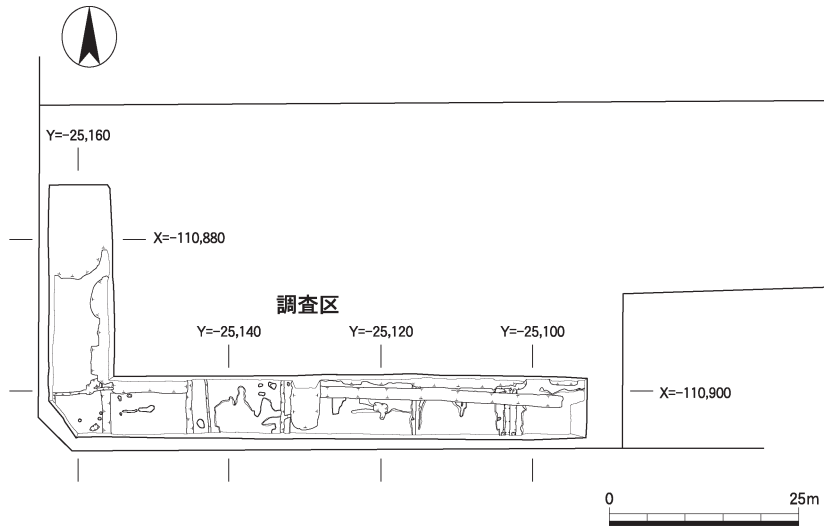


図3 調査区配置図(1:1,000)

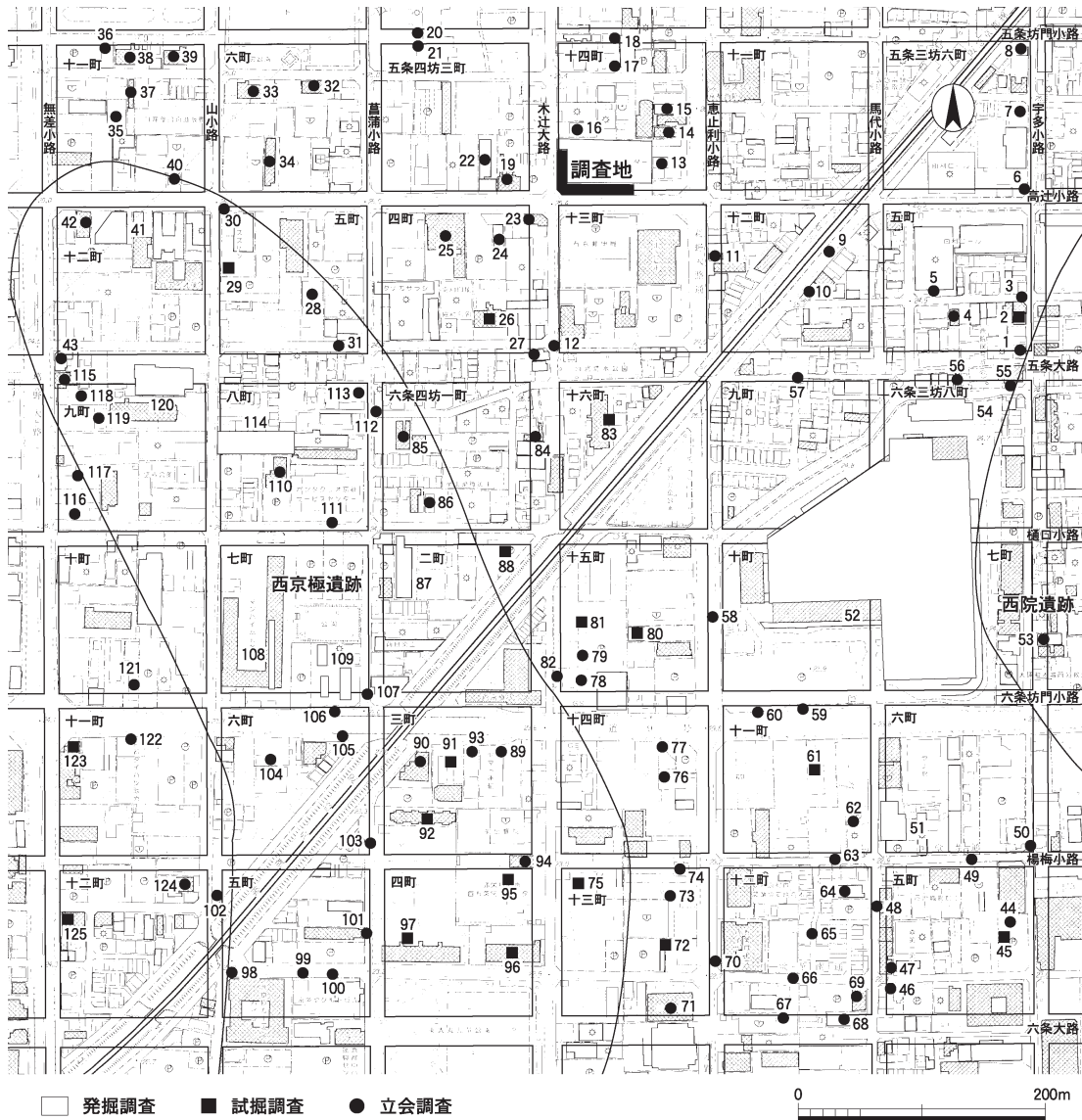


図4 調査位置図および周辺調査(1:6,000)

表1 周辺調査一覧表

調査地区	番号	調査機関	調査方法	調査年	掲載誌	概要
五条三坊五町	1	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1985	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度	GL-0.85mで平安前期の包含層
	2	京都市埋蔵文化財調査センター	試掘	1991	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度	GL-1.0mで平安前期の池・洲浜
	3	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1994	『京都市内遺跡立会調査概報』平成7年度	GL-0.6m以下、褐色砂泥(地山)
	4	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1989	『京都市内遺跡立会調査概報』平成元年度	GL-1.2mで褐色砂礫(地山)
	5	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1993	『京都市内遺跡立会調査概報』平成5年度	GL-0.6mで室町包含層。-0.9mで平安の南北流路
五条三坊六町	6	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1998	『京都市内遺跡立会調査概報』平成10年度	GL-0.43mで平安前期の宇多小路西側溝
	7	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2004	『京都市内遺跡立会調査概報』平成16年度	GL-0.96m以下、灰白色粘土(地山)
	8	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1998	『京都市内遺跡立会調査概報』平成10年度	GL-1.14m以下、黄褐色泥砂(地山)
五条三坊十二町	9	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1986	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度	時期不明の包含層。GL-1.17m以下、黄褐色砂泥(地山)
	10	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1987	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度	時期不明の包含層。GL-0.64m以下、黄褐色砂泥(地山)
	11	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1983	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度	GL-0.5mでにぶい黄褐色砂礫の流れ堆積
五条三坊十三町	12	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2004	『京都市内遺跡立会調査概報』平成16年度	GL-0.5m以下、褐色砂泥(地山)
五条三坊十四町	13	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1998	『京都市内遺跡立会調査概報』平成11年度	GL-1.7m以下、明褐色粘土(地山)
	14	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1993	『京都市内遺跡立会調査概報』平成5年度	GL-1.55m以下、明黄褐色泥砂(地山)
	15	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1985	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度	GL-1.55m以下で黄灰色砂泥(地山)
	16	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1993	『京都市内遺跡立会調査概報』平成5年度	GL-0.46mで平安の包含層
	17	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1999	『京都市内遺跡立会調査概報』平成11年度	GL-0.6mで室町包含層。GL-1.07m以下、明褐色粘土(地山)
	18	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1986	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度	GL-0.48mで平安前期の包含層
五条四坊三町	19	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1989	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度	GL-1.32mで住居址状の落込
	20	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1993	『京都市内遺跡立会調査概報』平成5年度	GL-1.5mで湿地状堆積
	21	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1993	『京都市内遺跡立会調査概報』平成5年度	GL-1.5mで湿地状堆積
	22	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2005	『京都市内遺跡立会調査概報』平成17年度	GL-1.7mで灰オリーブ色泥土の地山を掘り込んで時期不明の落込
五条四坊四町	23	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1985	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度	GL-1.31mで鎌倉包含層
	24	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1996	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成7年度	GL-1.1mで湿地状堆積
	25	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2001	『京都市内遺跡立会調査概報』平成14年度	GL-0.9mで湿地状堆積
	26	京都市埋蔵文化財調査センター	試掘	1994	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成6年	GL-1.8mで湿地状堆積
	27	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1986	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度	GL-1.82mで黄灰色微砂(地山?)
五条四坊五町	28	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1989	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度	GL-0.73mで黄褐色砂泥の地山を掘り込んで弥生後期の住居址状落込
	29	京都市埋蔵文化財調査センター	試掘	1993	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成5年度	GL-1.4mで弥生～古墳包含層

調査地区	番号	調査機関	調査方法	調査年	掲載誌	概要
五条四坊五町	30	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1987	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度	GL-1.21m平安前期包含層。-1.28m以下、黄灰色砂泥(地山)
	31	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1978	『西部幹線公共工事に伴う遺跡調査概報』1978年度	GL-0.5mで暗灰色泥土(湿地状堆積?)
五条四坊六町	32	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1986	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度	GL-1.44mで暗褐色粘土
	33	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1987	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度	GL-1.12mで時期不明の遺物包含流れ堆積
	34	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1986	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度	GL-1.44mで時期不明の包含層
五条四坊十一町	35	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1982	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度	GL-0.9mで時期不明の包含層
	36	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1985	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度	GL-1.06mで中世の包含層
	37	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1989	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度	GL-1.27mで古墳の包含層。-1.64m以下、黄褐色砂泥(地山)
	38	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1990	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成2年度	GL-0.64mで室町の包含層。-0.81m以下、黄褐色砂泥(地山)
	39	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1994	『京都市内遺跡立会調査概報』平成6年度	GL-1.0mで時期不明の包含層。-1.2m以下、黄褐色砂泥(地山)
	40	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1994	『京都市内遺跡立会調査概報』平成7年度	GL-1.2mで湿地状堆積
五条四坊十二町	41	(財)京都市埋蔵文化財研究所	発掘	1994	『平安京右京五条四坊』『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』	弥生後期の方形周溝墓2基、竪穴住居6棟、古墳末期と奈良の建物
	42	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1996	『京都市内遺跡立会調査概報』平成8年度	GL-0.75mで褐色砂泥の地山を掘り込んで弥生の土壌
	43	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2000	『京都市内遺跡立会調査概報』平成12年度	GL-0.98mで平安後期の包含層、-1.13mで平安中期の包含層、-1.46m以下、褐色砂泥(地山)
六条三坊五町	44	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1991	『京都市内遺跡立会調査概報』平成3年度	時期不明の土壌
	45	(財)京都市埋蔵文化財研究所	試掘	1990	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成2年度	時期不明の柱穴、土壌
	46	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1994	『京都市内遺跡立会調査概報』平成6年度	GL-0.9m以下、流れ堆積
	47	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1992	『京都市内遺跡立会調査概報』平成4年度	GL-0.51mで平安包含層
	48	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1990	『京都市内遺跡立会調査概報』平成2年度	平安の流れ堆積
	49	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1978	『西部幹線公共工事に伴う遺跡調査概報』1978年度	GL-0.9m茶褐色粘土(地山)
六条三坊六町	50	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2000-2001	『京都市内遺跡立会調査概報』平成13年度	GL-0.72mで弥生~古墳包含層。0.8m以下、黄褐色粘土(地山)
	51	(財)京都市埋蔵文化財研究所	発掘	2004	『平安京右京六条三坊六町跡』	平安前期の宅地、井戸、馬代小路。井戸から男女1組の人形
六条三坊七~十町	52	古代学協会	発掘	2000	『平安京右京六条三坊 平安京研究調査報告』第20輯	平安期、八町に1町占地の宅地、七町に1/2町ないし1/4町占地の宅地、河川跡から祭祀遺物。縄文中期~奈良の河川跡
六条三坊七町	53	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1982	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度	GL-0.9mで宇多小路東側溝
六条三坊八町	54	(財)京都市埋蔵文化財研究所	発掘	1990	『京都市埋蔵文化財調査概要』平成2年度	平安前期~中期の1町占地の建物
	55	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1988	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度	GL-1.05mで五条大路路面
	56	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1984	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度	平安中期包含層
六条三坊九町	57	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1978	『西部幹線公共工事に伴う遺跡調査概報』1978年度	暗灰色泥土(湿地状堆積か?)

調査地区	番号	調査機関	調査方法	調査年	掲載誌	概要
六条三坊十町	58	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1978	『西部幹線公共工事に伴う遺跡調査概報』1978年度	暗灰色泥土(湿地状堆積か?)
六条三坊十一町	59	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2002-2003	『京都市内遺跡立会調査概報』平成15年度	GL-1.25mで湿地状堆積
	60	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2003	『京都市内遺跡立会調査概報』平成15年度	GL-1.0mで湿地状堆積
	61	(財)京都市埋蔵文化財研究所	試掘	1988	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度	GL-2.0mで植物遺体含む湿地状堆積
	62	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1988	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度	GL-0.19mで平安包含層。-0.39m以下、茶褐色砂礫(地山)
	63	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1999	『京都市内遺跡立会調査概報』平成12年度	GL-0.98mで湿地状堆積
六条三坊十二町	64	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2002	『京都市内遺跡立会調査概報』平成14年度	GL-0.7mで室町中期包含層
	65	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2000	『京都市内遺跡立会調査概報』平成12年度	GL-0.4mで湿地状堆積
	66	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1999	『京都市内遺跡立会調査概報』平成12年度	GL-0.45mで湿地状堆積
	67	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1999	『京都市内遺跡立会調査概報』平成12年度	GL-1.0mで時期不明の包含層
	68	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1996	『京都市内遺跡立会調査概報』平成8年度	GL-0.9mで時期不明の包含層
	69	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1991	『京都市内遺跡立会調査概報』平成3年度	GL-0.45mで室町包含層
	70	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1978	『西部幹線公共工事に伴う遺跡調査概報』1978年度	GL-0.9mで茶褐色粘土(地山?)
六条三坊十三町	71	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1989-1990	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成2年度	GL-0.77mで時期不明の包含層、-0.85m以下、灰茶色泥砂(地山)
	72	京都市埋蔵文化財調査センター	試掘	1991	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度	GL-1.8m以下、茶褐色粘土(地山)
	73	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2004	『京都市内遺跡立会調査概報』平成16年度	GL-0.7mで室町中期の包含層
	74	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1991	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成3年度	GL-0.82mで灰黄褐色泥砂(地山か?)
	75	京都市埋蔵文化財調査センター	試掘	1993	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成5年度	GL-1.26mで湿地状堆積
六条三坊十四町	76	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1989-1990	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成2年度	GL-0.78mで黄褐色砂泥の地山を掘り込んで弥生後期の落込
	77	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1989-1990	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成2年度	GL-0.7mで黄褐色泥砂の地山を掘り込んで弥生の落込
六条三坊十五町	78	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1997-1998	『京都市内遺跡立会調査概報』平成11年度	GL-0.62mで弥生の包含層を掘り込んで、弥生~古墳の土壌
	79	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2000	『京都市内遺跡立会調査概報』平成13年度	GL-0.9mで湿地状堆積の落込の東肩
	80	(財)京都市埋蔵文化財研究所	試掘	1990	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成2年度	GL-1.1mで時期不明の湿地状堆積
	81	京都市埋蔵文化財調査センター	試掘	2000	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成12年度	GL-1.3mで古墳後期の南北溝
	82	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1978	『西部幹線公共工事に伴う遺跡調査概報』1978年度	GL-0.5mで地山の茶灰色粘土を掘り込んで弥生の落込
六条三坊十六町	83	京都市埋蔵文化財調査センター	試掘	2001	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成13年度	GL-3.0mで平安前期の包含層
六条四坊一町	84	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1994	『京都市内遺跡立会調査概報』平成7年度	GL-0.8m以下、灰黄褐色砂礫(地山)
	85	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1989	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度	GL-1.43mで古墳後期の土壌
	86	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2000	『京都市内遺跡立会調査概報』平成12年度	GL-0.5mで時期不明の包含層

調査地区	番号	調査機関	調査方法	調査年	掲載誌	概要
六条四坊二町	87	(財)京都市埋蔵文化財研究所	発掘	1989	『京都市埋蔵文化財調査概要』平成元年度	弥生中期～後期の竪穴住居5棟
	88	京都市埋蔵文化財調査センター	試掘	1997	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成9年度	GL-1.1mで黄橙色砂泥の地山を掘り込んで古墳後期の落込
六条四坊三町	89	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2004	『京都市内遺跡立会調査概報』平成17年度	GL-1.4mでにぶい黄褐色細砂の地山を掘り込んで弥生中期の土壇、溝、後期の溝
	90	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1979-1980	『京都市内遺跡試掘立会調査報告』昭和54年度	弥生中期の溝
	91	(財)京都市埋蔵文化財研究所	試掘	1987	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度	弥生土器を多量に含む溝。弥生～古墳の落込
	92	(財)京都市埋蔵文化財研究所	試掘	1986	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度	GL-1.48mで湿地状堆積
	93	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2003	『京都市内遺跡立会調査概報』平成15年度	GL-1.03m以下、にぶい黄色砂泥(地山)
六条四坊四町	94	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1997	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成8年度	GL-0.6m以下、褐色砂泥(地山)
	95	京都市埋蔵文化財調査センター	試掘	1997	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成9年度	GL-2.4m以上、湿地状堆積続く
	96	(財)京都市埋蔵文化財研究所	試掘	1988	『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度	GL-1.0mで湿地状堆積
	97	京都市埋蔵文化財調査センター	試掘	1999	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成11年度	灰色粘土の分厚い湿地状堆積
六条四坊五町	98	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1996	『京都市内遺跡立会調査概報』平成9年度	GL-0.8m以下、淡黄灰色砂泥(地山)
	99	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1996	『京都市内遺跡立会調査概報』平成9年度	GL-0.63mで時期不明の包含層
	100	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1996	『京都市内遺跡立会調査概報』平成9年度	GL-0.52mで湿地状堆積
	101	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1996	『京都市内遺跡立会調査概報』平成9年度	GL-0.35mで湿地状堆積。-1.15mで時期不明の土器器含む
	102	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2005	『京都市内遺跡立会調査概報』平成17年度	GL-0.6m以下、オリープ褐色砂泥(地山)
六条四坊六町	103	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1986	『京都市内遺跡立会調査概報』平成9年度	GL-0.28mで湿地状堆積
	104	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2005	『京都市内遺跡立会調査概報』平成17年度	GL-0.7mで湿地状堆積
	105	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1978	『西部幹線公共工事に伴う遺跡調査概報』1978年度	GL-0.95mで茶褐色粘土(地山)
	106	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2004	『京都市内遺跡立会調査概報』平成16年度	GL-1.7mでオリープ褐色砂泥の地山を掘り込んで時期不明の落込
六条四坊七町	107	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2004	『京都市内遺跡立会調査概報』平成16年度	GL-0.45mで弥生包含層。-0.66m以下、オリープ褐色砂泥(地山)
	108	(財)京都市埋蔵文化財研究所	発掘	1978	『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧』	弥生中期の東西溝。弥生の落込
	109	古代学協会	発掘	2005	未報告	弥生中期の竪穴住居3棟を伴う環濠。弥生後期の竪穴住居6棟
六条四坊八町	110	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2001	『京都市内遺跡立会調査概報』平成13年度	GL-0.37mで平安中期包含層。-0.65mで古墳中期の包含層を掘り込んで奈良の柱穴。-0.64mで褐色粘土の地山を掘り込んで古墳中期の柱穴
	111	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1978	『西部幹線公共工事に伴う遺跡調査概報』1978年度	土器器・須恵器含む包含層
	112	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2003-2004	『京都市内遺跡立会調査概報』平成16年度	GL-0.95mで湿地状堆積
	113	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2005	『京都市内遺跡立会調査概報』平成17年度	GL-0.71mで時期不明の包含層
	114	(財)京都市埋蔵文化財研究所	発掘	2006	調査中	

調査地区	番号	調査機関	調査方法	調査年	掲載誌	概要
六条四坊九町	115	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1988	『京都市内遺跡試掘立会調査報告』平成元年度	GL-1.3m以下、黄灰色砂泥(地山)
	116	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1991	『京都市内遺跡立会調査概報』平成3年度	GL-1.2mで湿地状堆積
	117	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1993	『京都市内遺跡立会調査概報』平成5年度	GL-0.8mで湿地状堆積
	118	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2001	『京都市内遺跡立会調査概報』平成13年度	GL-1.1m以下、黄褐色粘土(地山)
	119	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2003	『京都市内遺跡立会調査概報』平成16年度	GL-1.16mで黄褐色砂泥(地山?)
	120	京都文化財団	発掘	1990	『平安京右京六条四坊九町・五条大路 京都文化博物館調査研究報告』第8集	縄文の土壌。弥生～古墳の溝。古墳後期の竪穴住居3棟。五条大路に伴う轍、足跡、側溝。鎌倉の土壌、溝
六条四坊十町	121	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	2000	『京都市内遺跡立会調査概報』平成12年度	GL-0.75mで時期不明の包含層
六条四坊十一町	122	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1983	『京都市内遺跡試掘立会調査報告』昭和58年度	GL-1.3mで近世以降の包含層
	123	(財)京都市埋蔵文化財研究所	試掘	1983	『京都市内遺跡試掘立会調査報告』昭和58年度	GL-1.24mで湿地状堆積
六条四坊十二町	124	(財)京都市埋蔵文化財研究所	立会	1996	『京都市内遺跡立会調査概報』平成8年度	GL-0.8mで湿地状堆積
	125	(財)京都市埋蔵文化財研究所	試掘	1984	『京都市内遺跡試掘立会調査報告』昭和59年度	GL-2.0mで湿地状堆積

坊七・八・九・十町で行われ、平安時代には、八町に1町規模の大規模宅地の存在が明らかになった。また、縄文時代から奈良時代にかけては旧河川が存在していたことがわかり、木簡や人形、馬や狼の骨などが確認されている(表1-52)。

また、調査地の南西に広がる西京極遺跡では、弥生時代の環濠とされる溝や竪穴住居が多数確認されており、地域の拠点的な集落である可能性が高い。今回の調査は西京極遺跡の範囲外ではあるが、周辺の遺跡から考えて、平安京以前の良好な遺構の検出が期待された。

3. 遺 構

(1) 基本層序と遺構の概要 (図5・6、表2)

地形 調査区の地形は、東側から西側にかけてわずかに下がっており、比高差は約0.3 mである。これに対し、調査で把握した遺構検出面は中世では水田が形成されていたため、ほぼ水平であるが、平安時代以前の検出面は、東側から北西に向かって高くなっている。

基本層序 調査区の基本層序は、調査区全体で現地表面 (以下GL) から -0.15 mから -0.7 mまでは現代盛土である。以下、近現代の耕作土、床土と続き、GL-0.6 m前後で鎌倉・室町時代の遺構(水田・畦畔)、GL-0.9 mで中世包含層、GL-1.0 mで褐色シルトまたは褐色砂礫からなる地山となる。弥生時代から平安時代の遺構は地山上面から掘り込まれている。

遺構の概要 今回の調査で、弥生時代から室町時代の遺構を確認することができた。しかし、これらは継続するものではなく、弥生時代、古墳時代、平安時代、鎌倉・室町時代の4時期に大別されるものである。

検出した主な遺構は、弥生時代の方形周溝墓 (方形周溝墓1～6)、土壙 (土壙119・121・168・174など)、溝 (溝19・116など)、古墳時代の建物 (建物1)、土壙 (土壙36)、平安時代の建物 (建物2～5)、柵 (柵6)、道路築地の内溝 (溝80・273)、宅地内溝 (溝92)、井戸 (井戸118)、土壙 (土壙56・76・171など) がある。鎌倉・室町時代の遺構は調査区東側に存在し、水田 (落込み1～4)、水田畦畔 (畦13～16)、畑、土壙 (土壙5～12) などがある。

(2) 弥生・古墳時代の遺構 (図7、図版1)

1) 方形周溝墓

方形周溝墓1 (図8、図版2-1・3-2) 調査区北端で検出した一辺11 mの周溝墓である。周溝は幅1.1～1.3 m・深さ0.3～0.55 mで東コーナー部が攪乱で破壊されているが、全周すると思われる。溝の断面形状はU字形で、埋土は黒色粘質土などからなる。中軸線の方向はN45°Wである。主体部・埋葬施設は削平され残っていなかった。3辺の周溝の内、東西の周溝からは遺物はほとんど認められなかったが、南辺の周溝からは遺物が多く出土した。中でもほぼ完形

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
弥生時代	方形周溝墓1～6、溝19・116、土壙119・121・168・174	
古墳時代	建物1、土壙36・249	
平安時代	建物2～5、柵6、溝80・92・273、井戸118、土壙56・76・171	
鎌倉・室町時代	落込み1～4、畦13～16	

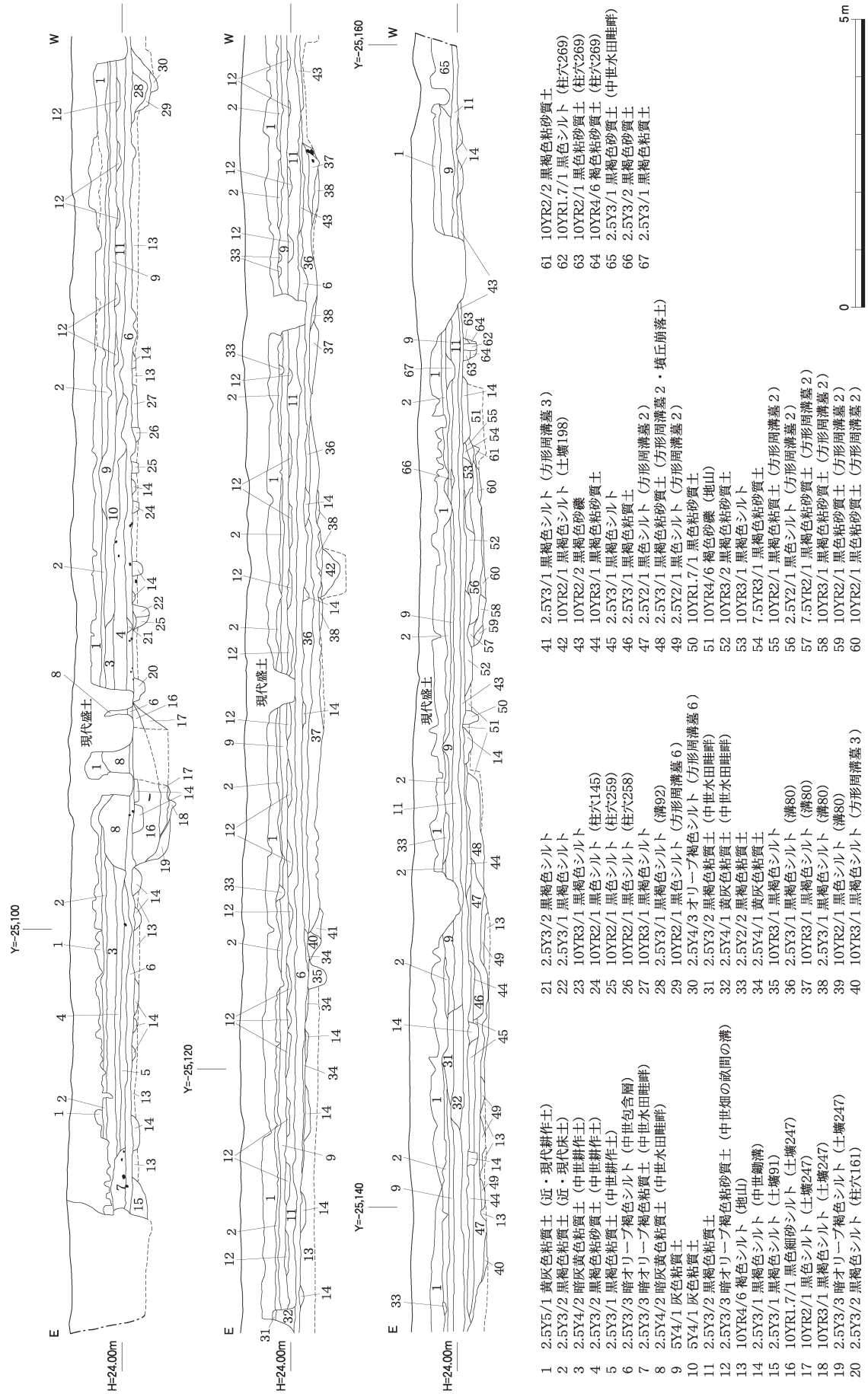


図5 北壁断面図 (1 : 100)

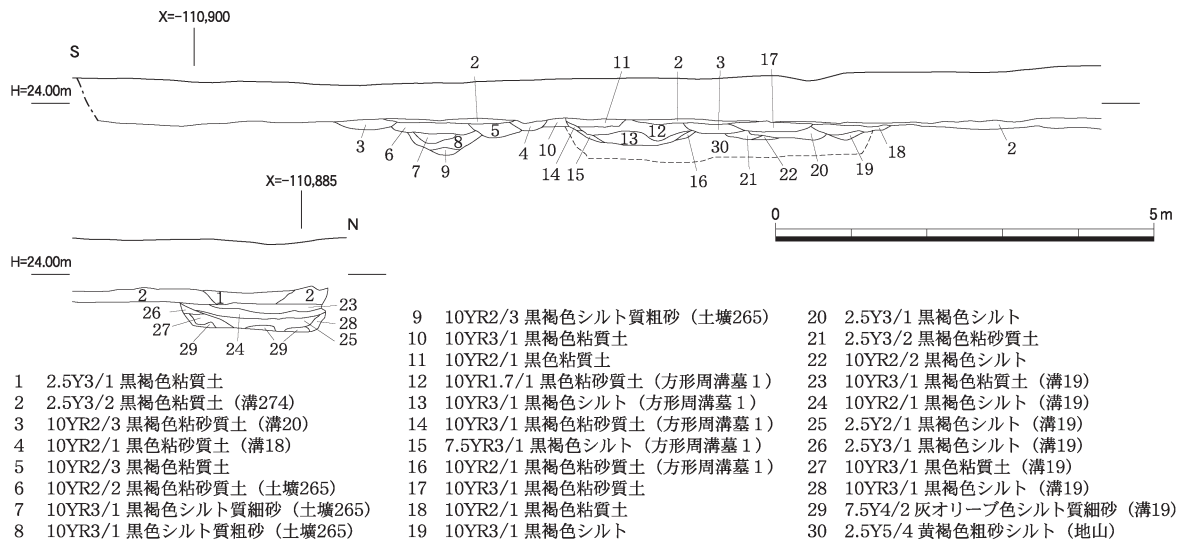


図6 西壁断面図 (1:100)

の広口長頸壺が口縁部を下に向け、溝の底から少し浮いた状態で出土した。弥生時代中期前半から中頃と考える。

方形周溝墓2 (図9、図版2-2) 調査区西辺で検出した一辺19mの周溝墓である。周溝は幅2.6～3.6m・深さ0.3～0.5mで、全周すると考えられる。溝の断面形状はレ字形で、墳丘側がほぼ垂直に下がる。埋土は墳丘崩落土と考えられる黒褐色細砂シルトや平安時代前期の遺物が多く混じる黒色シルトである。主軸の方向はN30°Wである。主体部・埋葬施設は明らかでない。遺物はほとんど認められなかったが、南辺の周溝から近江系の受口状口縁の甕が出土した。底から少し浮いた状態で、墳丘の崩落土と思われる埋土から出土した。弥生時代後期後半と考える。また、南辺中央の土壌174は主軸を同じくすることから、埋蔵施設の一つである可能性がある。

方形周溝墓3 (図10、図版3-3) 調査区中央部で検出した一辺6mのやや歪んだ方形の周溝墓である。周溝は幅0.4～0.5m・深さ0.2～0.3mで、北西角の周溝は途切れている。また東辺の周溝は方形周溝墓4の西辺周溝に掘り込まれている。溝の断面形状はV字形で、埋土は黒褐色シルトである。中軸線の方向はN45°Wである。主体部・埋葬施設は削平され残っていなかった。調査区内の3辺の周溝の内、北と西辺の周溝には遺物はほとんど認められなかったが、東辺の周溝から土器が4個体出土している。これらの土器は周溝の底に接して出土している。弥生時代中期中頃と考える。

方形周溝墓4 (図10・11、図版3-4) 調査区中央部で検出した一辺7mの周溝墓である。周溝は3辺を確認でき、幅は0.4～0.8m・深さ0.25mで北西角、北東角の周溝は途切れている。西辺の周溝は方形周溝墓3の周溝を掘り込んでいる。断面形状はU字形で、埋土は黒色シルトである。中軸線の方向はN45°Wである。主体部・埋葬施設は削平され残っていなかった。遺物は3辺の周溝の内、北辺の周溝で3個体の土器が集中して出土した。これらの土器は埋土の最上層から出土している。弥生時代中期後半と考える。また、方形周溝墓3と中軸線を同じくしていることから、意識して造られたと考えられる。

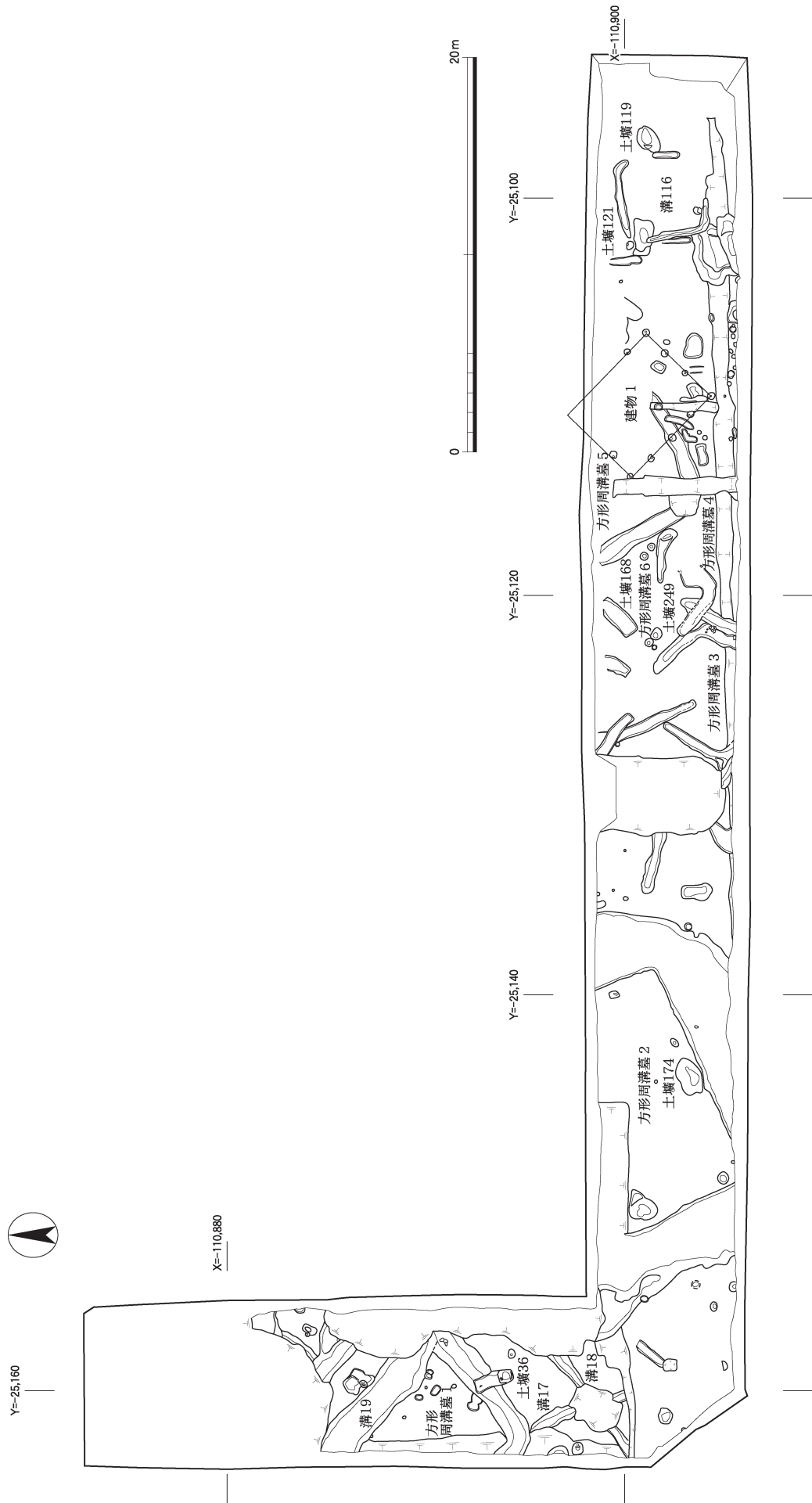
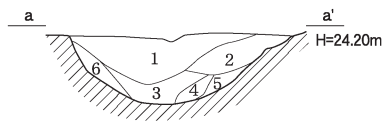
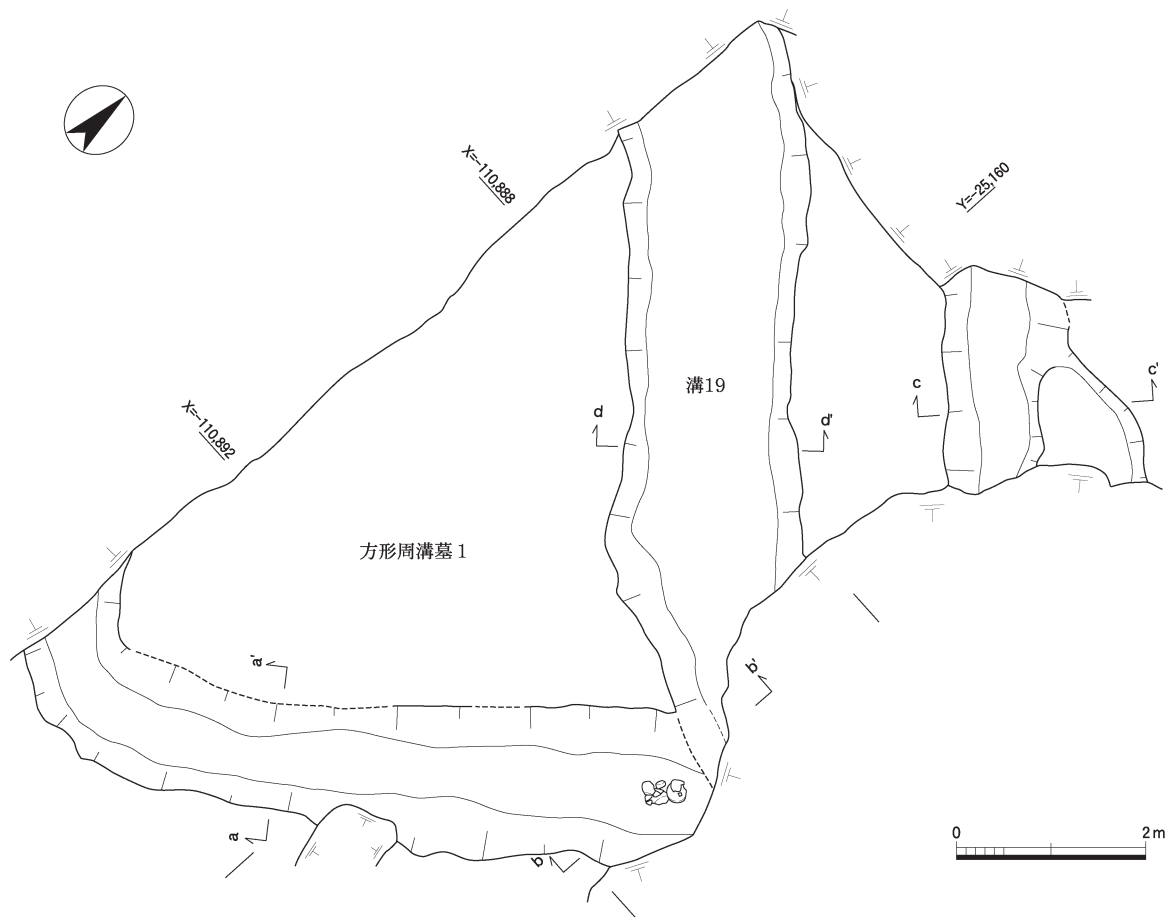
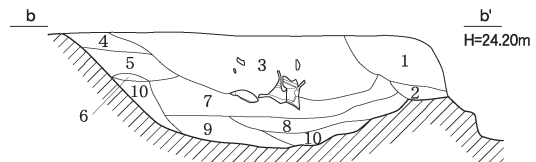


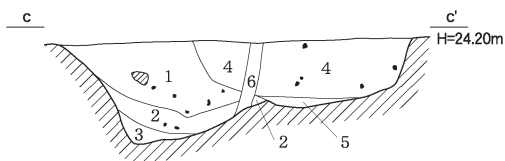
图7 弥生・古墳時代遺構平面図 (1 : 300)



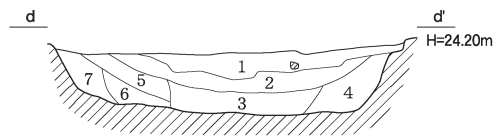
- 1 7.5YR2/1 黒色粘質土
- 2 10YR2/2 黒褐色粘砂質土 黄色粗砂を少量含む
- 3 7.5YR2/1 黒色粘質土
- 4 10YR3/2 黒褐色粘砂質土
- 5 10YR2/3 黒褐色粘砂質土 黄色粗砂を多量に含む
- 6 10YR3/2 黒褐色粘砂質土 全体に3cm以下の礫を含む



- 1 10YR3/1 黒褐色シルト 黄色粗砂を少量含む
- 2 10YR2/1 黒色粘砂質土 黄色粗砂を少量含む
- 3 7.5YR2/1 黒色粘質土
- 4 7.5YR2/3 極暗褐色粘砂質土 黄色粗砂を少量含む
- 5 7.5YR3/2 黒褐色粘砂質土
- 6 7.5YR3/1 黒褐色シルト
- 7 7.5YR2/1 黒色粘質土
- 8 7.5YR3/3 暗褐色粘砂質土 黄色粗砂を少量含む
- 9 7.5YR1.7/1 黒色シルト
- 10 10YR2/2 黒褐色粘砂質土 黄色粗砂を少量含む 全体に5cm以下の礫を含む



- 1 7.5YR2/1 黒色粘質土 5mm以下の礫・黄色粗砂を多量に含む
- 2 10YR3/4 暗褐色シルト質細砂 黄色シルトを少量含む
- 3 7.5YR2/1 黒色粘質土 5cm以下の礫を多量に含む
- 4 5YR2/1 黒褐色シルト 5cm以下の礫・鉄分を少量含む
- 5 10YR3/1 黒褐色シルト質細砂 黄色シルト質細砂を帯状に含む
- 6 10YR4/4 褐色シルト質細砂 植物痕か



- 1 10YR2/2 黒褐色粘砂質土 褐色砂質土ブロック状に含む
- 2 10YR3/1 黒褐色粘質土 2~3cmの礫を少量含む
- 3 10YR2/1 黒色シルト
- 4 10YR3/1 黒褐色粘砂質土 3cm以下の礫・鉄分を多量に含む
- 5 10YR3/1 黒褐色シルト 黄色粗砂をブロック状に含む 3cm以下の礫を少量含む
- 6 10YR2/2 黒褐色粘砂質土 3cm以下の礫を少量含む
- 7 10YR2/1 黒色粘砂質土 黄色粗砂を少量含む



図8 方形周溝墓1実測図(平面図1:80、断面図1:40)

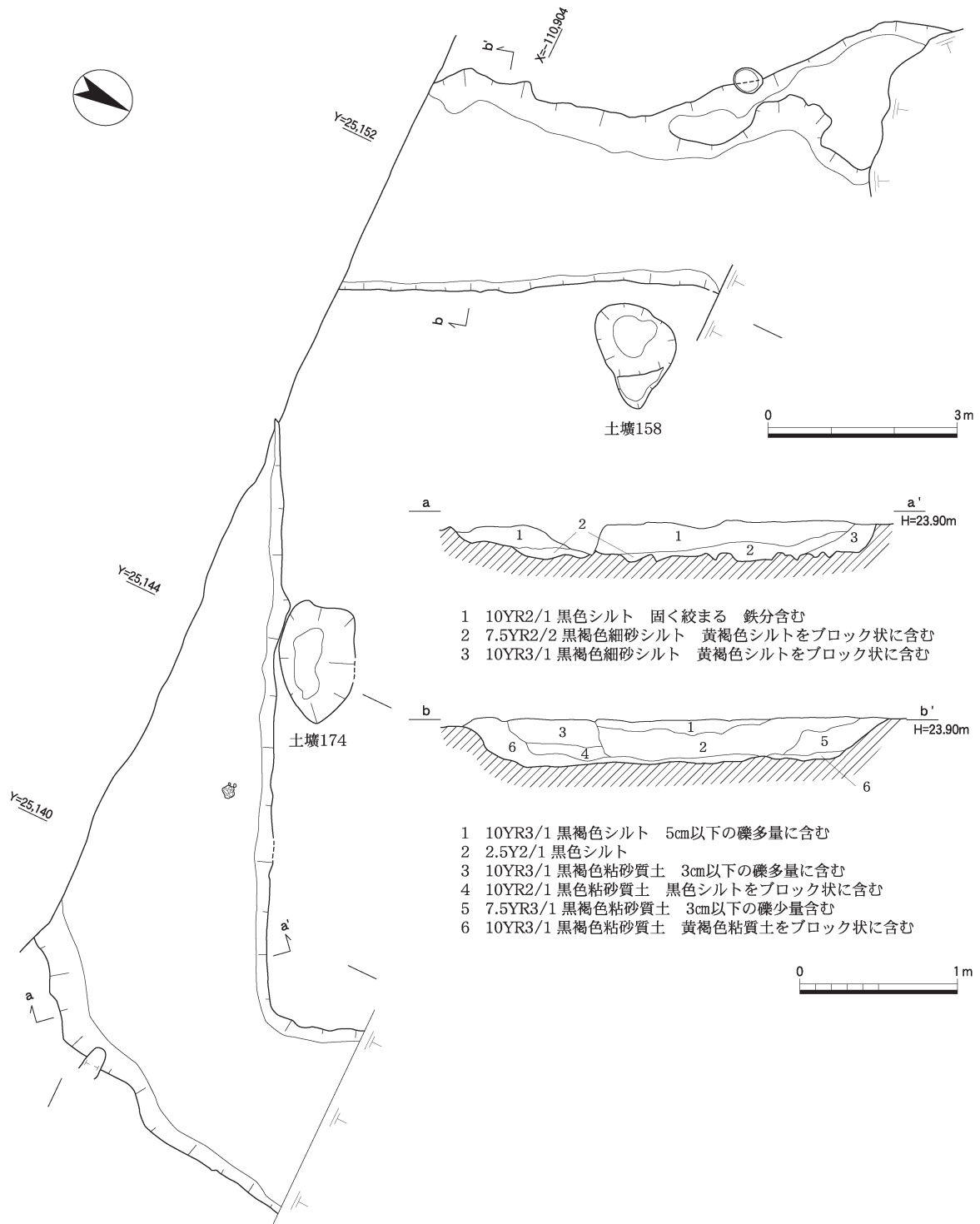


図9 方形周溝墓2実測図（平面図1：100、断面図1：40）

方形周溝墓5（図12）調査区中央部東寄りで検出した一辺が7m以上の周溝墓である。2辺の周溝しか確認できなかったため、全体の大きさは不明である。周溝は、南西コーナーが削平されているが、全周すると考えられる。幅は0.6～1.1m・深さは0.15～0.2mである。断面形はU字形で、埋土は黒褐色シルトである。中軸線はN30°Wである。主体部、埋葬施設は削平され残っていなかった。遺物がほとんど認められなかったため、詳細な年代は不明であるが、中軸線の方

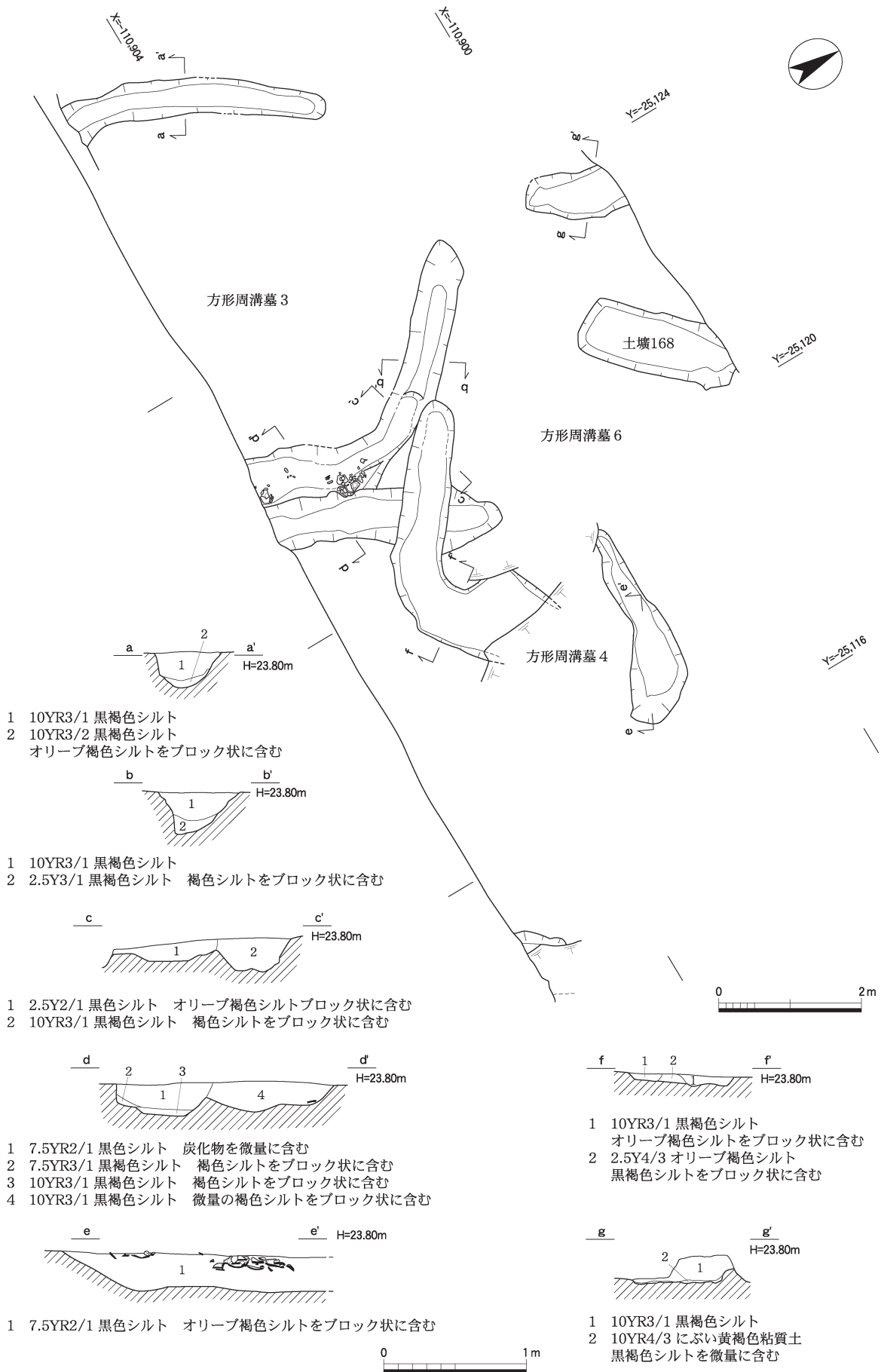


図10 方形周溝墓3・4・6実測図（平面図1：80、断面図1：40）



図 11 方形周溝墓 4 遺物出土状況 (1 : 20)

位から弥生時代後期と考えたい。

方形周溝墓 6 (図 10) 調査区中央部で検出した一辺が 7 m の不整形な長方形をした周溝墓である。周溝は 3 辺を確認しているが、後世の削平により南辺の周溝は一部しか確認できなかった。東辺の周溝は方形周溝墓 5 の周溝に破壊されたのか、当初より存在しなかったのかは不明である。幅は 0.6 ~ 1.2 m ・ 深さは 0.05 ~ 0.2 m と浅い。北西角の周溝は途切れている。断面形状は U 字形で、黒褐色シルトである。中軸線は N45° W である。主体部は削平され残っていなかったが、土壌 168 は中軸線を同じくすることから、埋葬施設の可能性がある。遺物は細片が出土したのみである。方形周溝墓 3 ・ 4 を掘り込んでいることから、弥生時代中期後半以降と考えられるが、詳細は不明である。

2) 溝

溝 17・18 調査区西端で検出した溝である。17・18

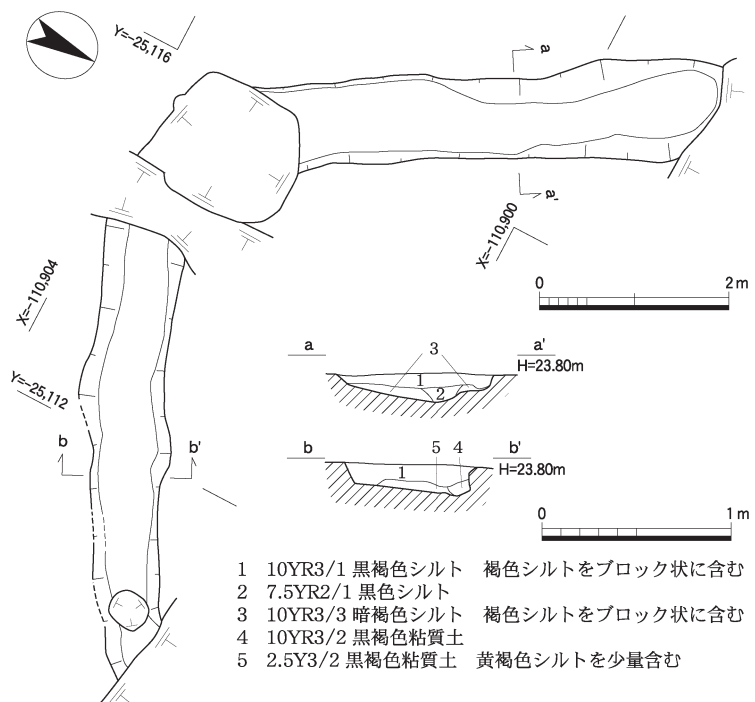


図 12 方形周溝墓 5 実測図 (平面図 1 : 80、断面図 1 : 40)

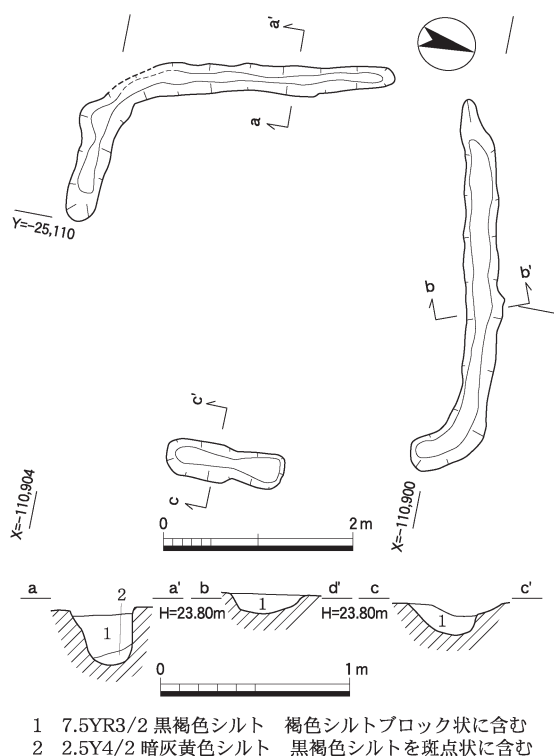


図13 溝116実測図（平面図1：80、断面図1：40）

年代は不明であるが、弥生時代中期後半の遺物が出土した土壌119を掘り込んでいる。

溝19(図8、図版2-1) 調査区北端で検出した、N45° Wの南北方向の溝である。長さ9m以上、幅1.8～2.1m、深さ0.6mで、断面形はU字形で、埋土は黒褐色粘質土などからなる。この溝の延長線上にある調査区南側では確認できなかったため、途中で北方向に曲がっていると考え。方形周溝墓1を掘り込んでいる。遺物は土師器・須恵器が出土しており、年代は古墳時代後期と考える。

3) 土壌

土壌174(図14) 調査区西辺で検出した。長軸2m・短軸1.25m・深さ0.4mで、埋土は黒色粘質土である。断面観察から、木質の痕跡が見受けられたため、木棺墓と考える。中軸線が方形周溝墓2と同じであることから、埋葬施設の一つとしての可能性も考えられる。遺物は認められなかった。

土壌168(図14、図版3-1) 調査区中央部で検出した。長軸2.2m以上・短軸0.75m・深さ0.35mで、断面観察から、木質の痕跡が確認できたことから、木棺墓であった可能性が高い。中軸線が方形周溝墓6と同じであることから、埋葬施設であると考えられる。遺物は認められなかった。

土壌121(図14) 調査区東辺で検出した。長軸1.1m・短軸0.85m・深さ0.4mで、埋土は3層からなり、上層から黒色シルト、黒褐色シルト、黒色シルトである。溝116に掘り込まれている。遺物は認められなかった。

土壌119(図14) 調査区東端で検出した。長軸1.2m・短軸0.9m・深さ0.25mで、埋土は

が交差する場所に攪乱があるため、詳細は不明である。17・18ともに幅0.5m・深さ0.15mである。断面形はV字形であり、埋土は黒色粘砂質土である。中軸線はN30° Wである。遺物は認められなかった。

溝116(図13) 調査区東端で検出した一辺4.5mの正方形に回る溝である。南辺の一部と北西角、北東角、南東角が切れている。溝の幅は0.3～0.4m・深さは0.1～0.3mと狭く浅いが、しっかりと掘られている。断面形状はU字形で、埋土は黒褐色シルトである。中軸線はN10° Wである。当初、竪穴住居の壁溝と考えていたが、溝の内側で柱穴や炉の痕跡を見つけることができなかったため、方形周溝墓の可能性も考えられる。遺物はほとんど認められなかったため、詳細な年

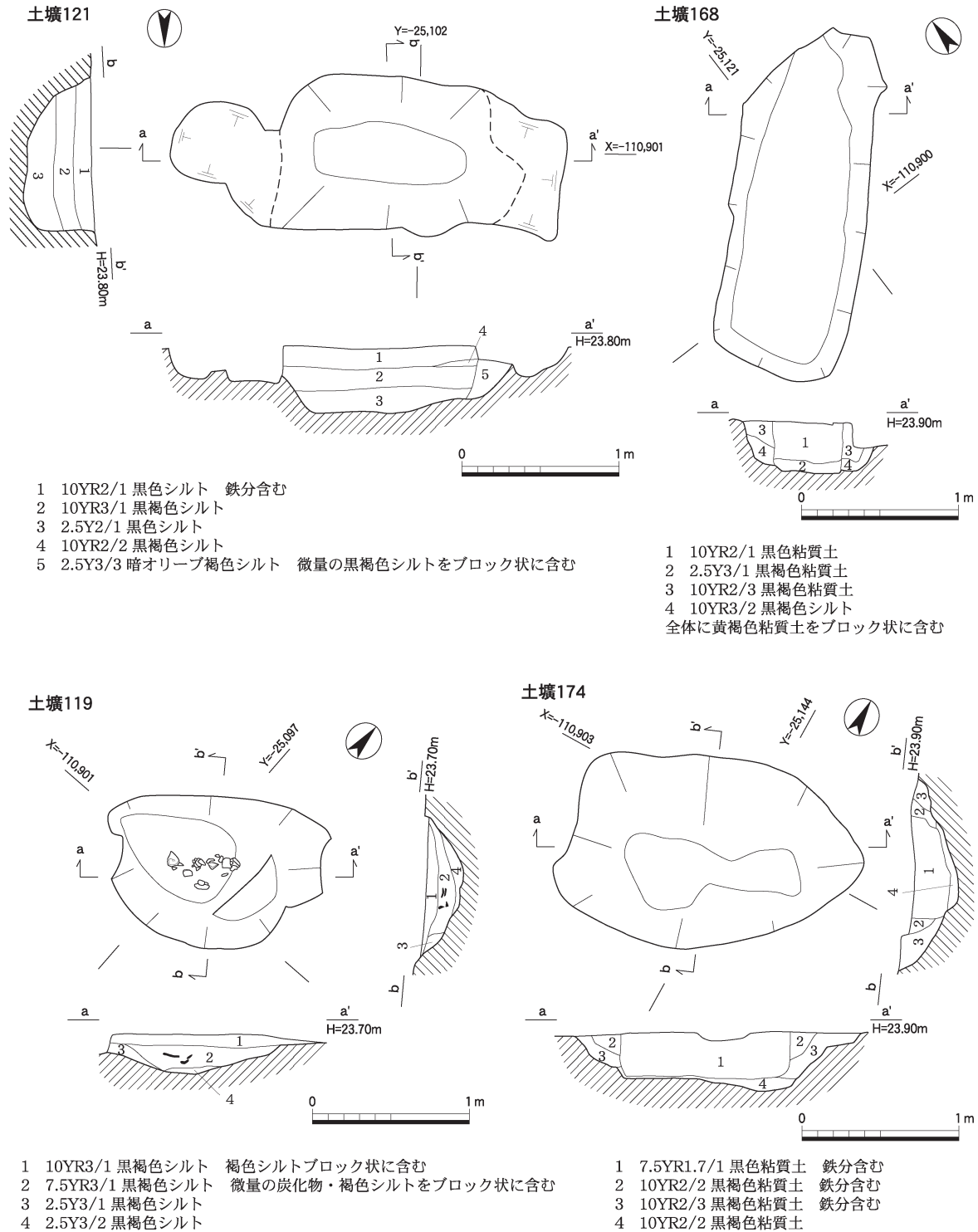
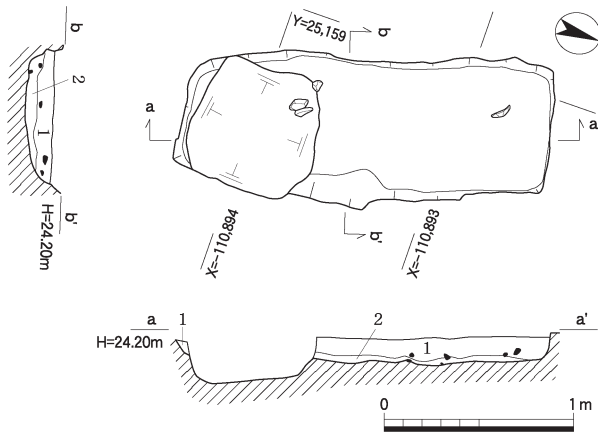


図14 土壌119・121・168・174実測図(1:40)

2層からなり、上層が黒褐色シルト、下層も黒褐色シルトであるが微量の炭化物を含む。溝116に掘り込まれている。底から少し浮いた状態で弥生時代中期後半の長頸壺が出土している。

土壌36(図15、図版4-2) 調査区北辺で検出した。長軸2m・短軸0.8m・深さ0.15mの隅丸長方形をしており、埋土は2層からなり、上層が黒褐色シルト、下層が極暗褐色シルトである。南半分は平安時代の柱穴に掘り込まれている。埋土から、須恵器杯身が出土しており、古墳時代



- 1 7.5YR2/2 黒褐色シルト 炭化物を微量に含む
- 2 7.5YR2/3 極暗褐色シルト 黄色砂質土をブロック状に含む 全体に5cm程度の礫を多く含む

図 15 土壌 36 実測図 (1 : 40)

× 4 間の掘立柱建物で、中軸線は N45° W である。柱穴掘形は楕円形で一辺 0.35 ~ 0.4 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m である。遺物は認められなかったが、弥生時代後期と考える方形周溝墓 5 を掘り込み、平安時代前期の遺構に掘り込まれている。また、建物の方位から古墳時代に比定した。

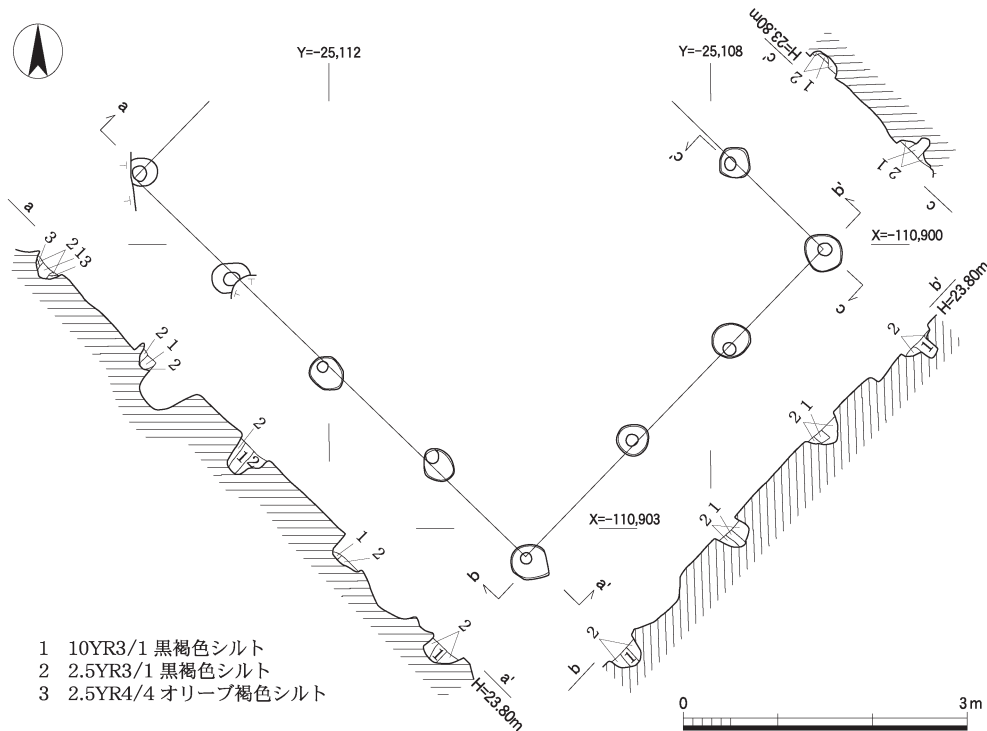
後期に属するものとする。形状から土壇墓と考える。

土壇 249 調査区中央部で検出した。幅 0.6 m ・ 深さ 0.3 m の楕円形の掘形で、埋土は黒褐色シルトである。埋土中から土師器杯が出土しており、飛鳥時代に属するものとする。

4) 掘立柱建物

建物 1 (図 16、図版 4 - 1) 調査区

東辺で検出した。柱間約 1.5 m で 3 間



- 1 10YR3/1 黒褐色シルト
- 2 2.5YR3/1 黒褐色シルト
- 3 2.5YR4/4 オリーブ褐色シルト

図 16 建物 1 実測図 (1 : 80)

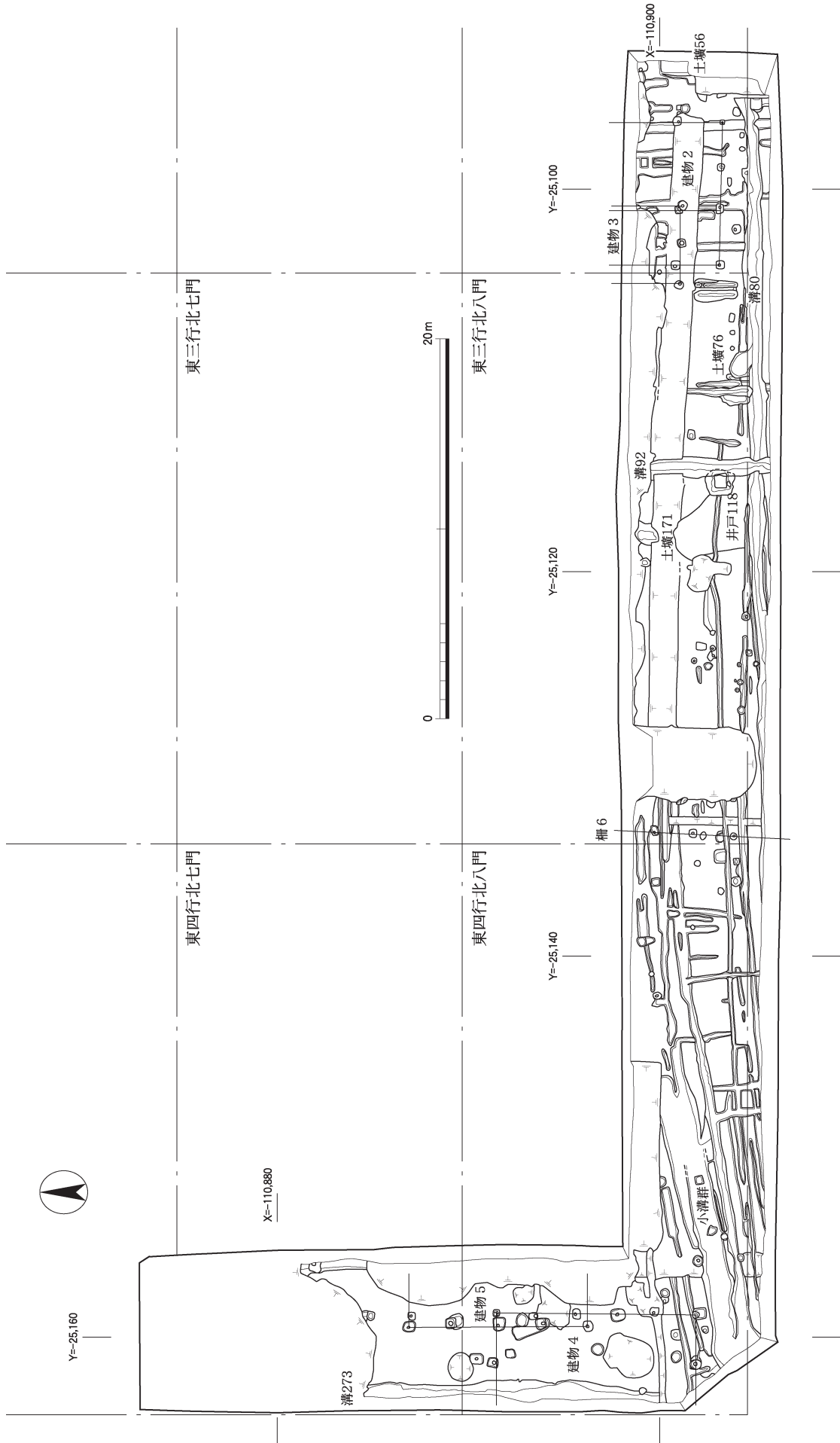


图 17 平安時代遺構平面図 (1 : 300)

(3) 平安時代の遺構 (図 17、図版 5)

1) 掘立柱建物

建物 2 (図 18、図版 6-1) 調査区東端で検出した、西側に庇をもつ 2 間×2 間以上の南北棟の掘立柱建物である。身舎の柱間は約 2.4 m (8 尺)、西庇の出は約 3.0 m (10 尺) である。柱穴掘形は方形を呈し、一辺 0.4 ~ 0.45 m・深さ 0.2 ~ 0.4 m である。西庇柱列は、十四町を東西にわける中軸線とほぼ重なる。また、南妻柱筋と高辻小路北側築地の宅地内溝の北肩筋との距離は約 1.2 m で近接している。柱穴の重複関係から建物 3 に先行する。

建物 3 (図 19、図版 6-1) 調査区東端で、東西に 3 基の柱穴を検出した。南北棟の掘立柱建物の南妻柱筋と考えられる。柱間は約 2.1 m (7 尺) である。柱穴掘形は中央の柱穴は方形、他は不整形で、一辺 0.4 ~ 0.55 m・深さ 0.2 m である。

建物 4 (図 19) 調査区西端で検出した、2 間×5 間の南北棟の掘立柱建物である。桁行柱筋の柱間は約 2.1 m (7 尺)、妻柱筋の柱間は約 2.4 m (8 尺) である。柱穴掘形は方形と不整形なものが混じり、一辺 0.4 ~ 0.6 m・深さ 0.3 ~ 0.6 m である。

建物 5 (図 19) 建物 4 の西に接して、5 基の柱穴を検出した。南北棟の掘立柱建物の西側桁行柱筋と考えられる。柱間は約 2.4 m (8 尺) である。柱穴掘形は方形で、一辺 0.55 ~ 0.7 m・深さ 0.15 ~ 0.3 m である。

2) 柵

柵 6 (図 19) 調査区中央部で、南北に 3 基の柱穴を検出した。柱間は約 2.1 m (7 尺) である。柱穴掘形は不整形で、一辺 0.45 m・深さ 0.1 m である。宅地の東三行と東四行の境とほぼ重なる。

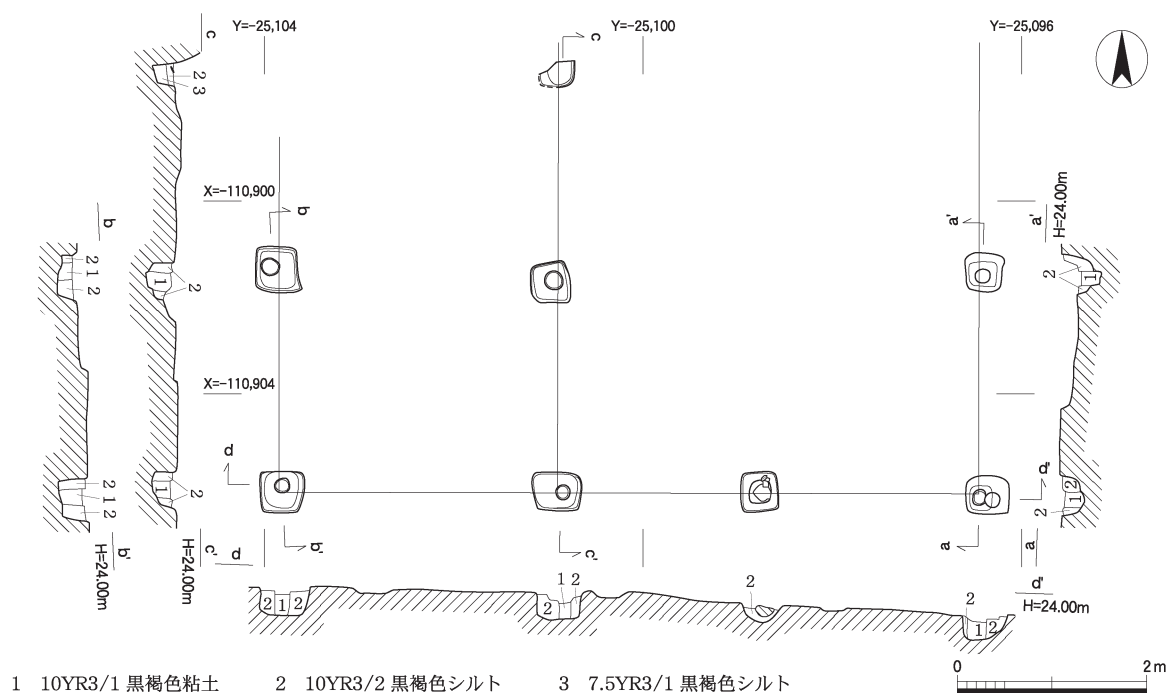


図 18 建物 2 実測図 (1 : 80)

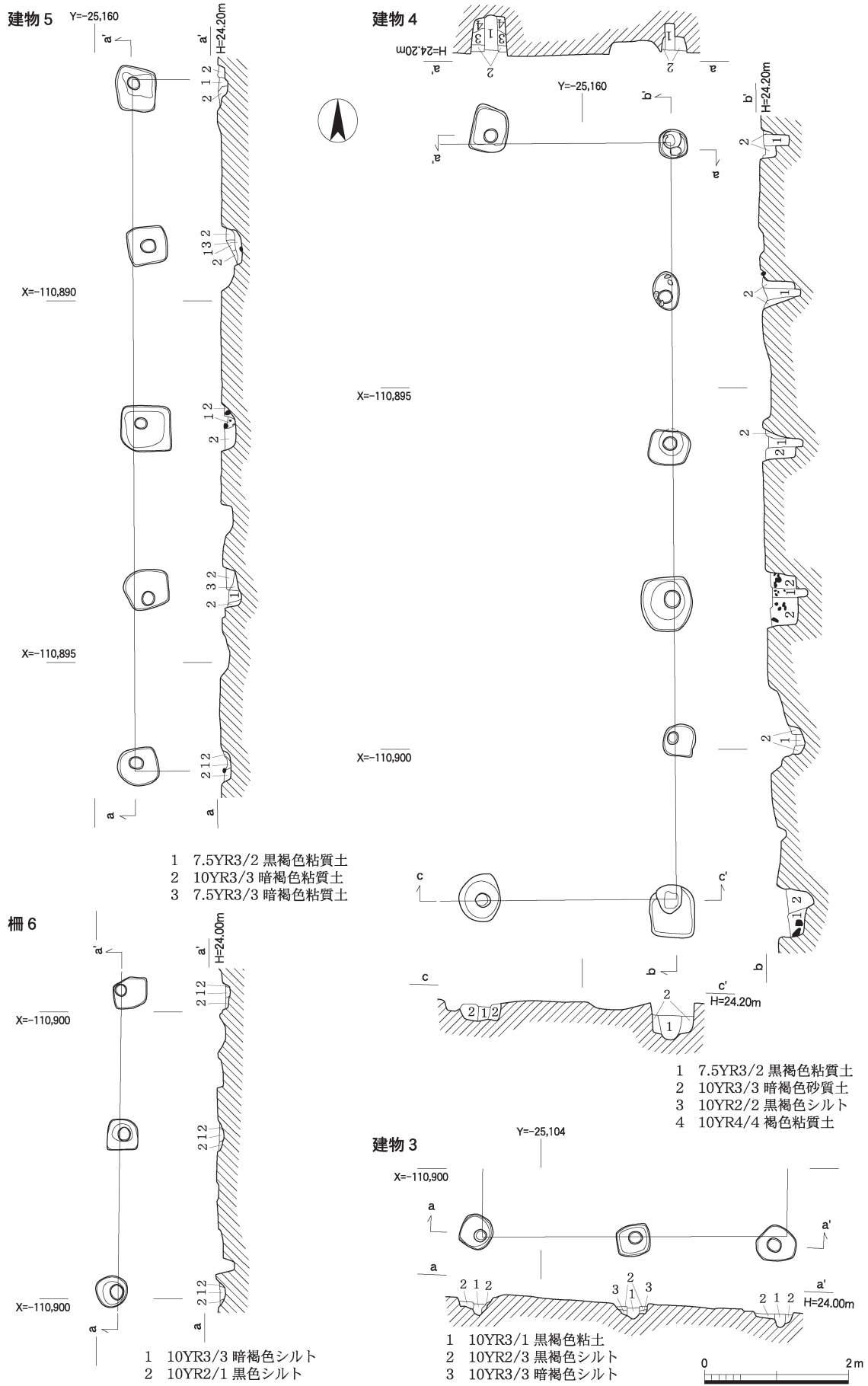
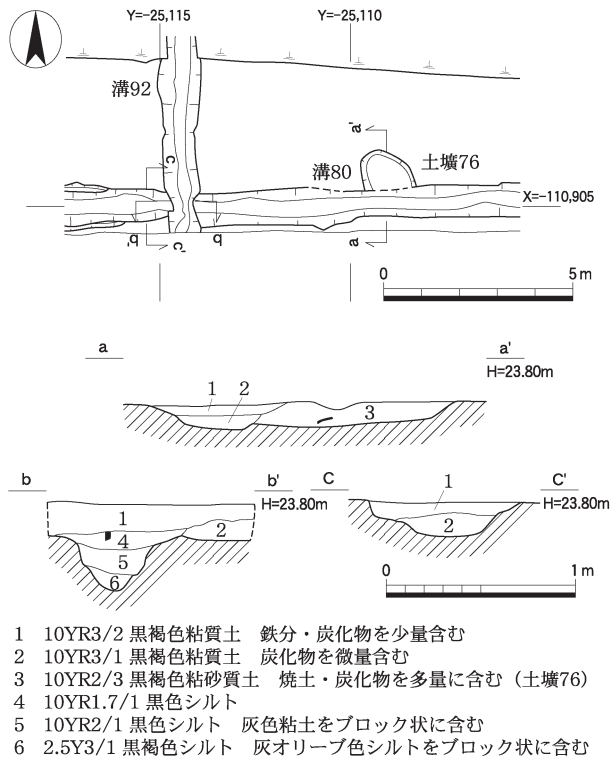
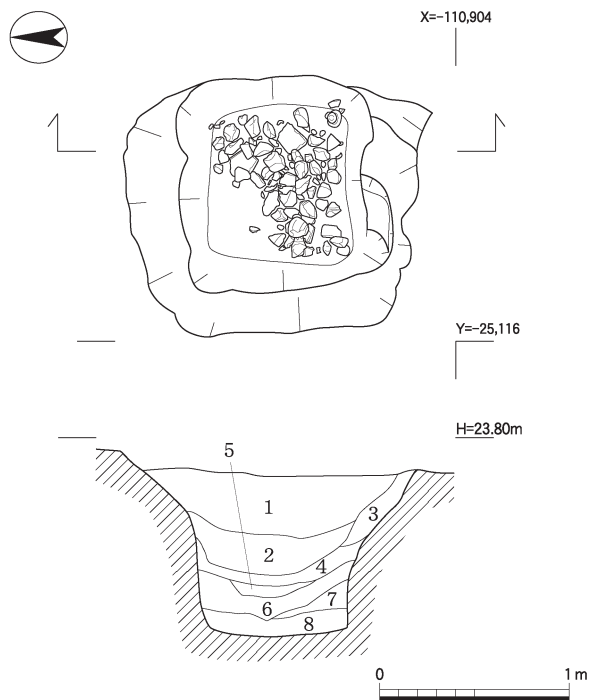


図 19 建物 3～5・柵 6 実測図 (1 : 80)



- 1 10YR3/2 黒褐色粘質土 鉄分・炭化物を少量含む
- 2 10YR3/1 黒褐色粘質土 炭化物を微量含む
- 3 10YR2/3 黒褐色粘砂質土 焼土・炭化物を多量に含む(土壌76)
- 4 10YR1.7/1 黒色シルト
- 5 10YR2/1 黒色シルト 灰色粘土をブロック状に含む
- 6 2.5Y3/1 黒褐色シルト 灰オリーブ色シルトをブロック状に含む

図20 溝80・92実測図
(平面図1:200、断面図1:40)



- 1 10YR3/1 黒褐色シルト 3cm以下の礫・オリーブ灰色シルトのブロック・鉄分・炭化物少量含む
- 2 10YR2/1 黒色シルト 炭化物を微量含む
- 3 10YR2/2 黒褐色粘質土
- 4 2.5Y3/1 黒褐色シルト オリーブ灰黄色シルトを斑状に含む
- 5 2.5Y2/1 黒色細砂シルト
- 6 10YR3/1 黒褐色シルト オリーブ灰色シルトを斑状に含む
- 7 10YR1.7/1 黒色細砂シルト
- 8 10YR3/1 黒褐色細砂シルト 10cm前後の礫を多く含む

図21 井戸118実測図(1:40)

3) 溝

溝80(図20、図版6-2)調査区東半部の南端で検出した、東西方向の溝である。長さ42m以上、幅0.7~1.0m、深さ0.25~0.4mである。断面はU字形で、埋土は黒褐色粘質土で、上下2層に分れる。高辻小路の北側築地の推定ラインとほぼ重なるが、築地の宅地内溝と考えられる。東西軸より北に約 $3^{\circ}30'$ の傾きをもつ。遺物は、土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器などが出土している。

溝92(図20、図版6-3)調査区東半部で検出した、南北方向の溝である。溝80と直角に交わる。長さ6.4m以上、幅0.8~1.2m、深さ0.25~0.7mで溝80との交叉部が最も深くなる。断面はU字形で、埋土は黒褐色粘質土である。宅地内の排水を目的とした溝で、築地を突き抜けて高辻小路の北側道路側溝に通じていると思われる。また、溝80との交叉部が深くなっているには、宅地内への水の逆流を防ぐための施設と考えられる。また、断面の観察から溝80より早く埋まったと思われる。遺物は、土師器、須恵器などが出土しているが、量は極めて少なく、ほとんどが小片である。

溝273 調査区の西端で検出した、南北方向の溝である。上半部は現代の溝によって攪乱されていた。長さは15m以上あるが、幅は東肩のみの検出のため不明である。埋土の最下層は黒褐色粘質土である。木辻大路の東側築地の推定ライン内側に位置しているため、築地の宅地内溝と考えられる。遺物は、須恵器が出土している。

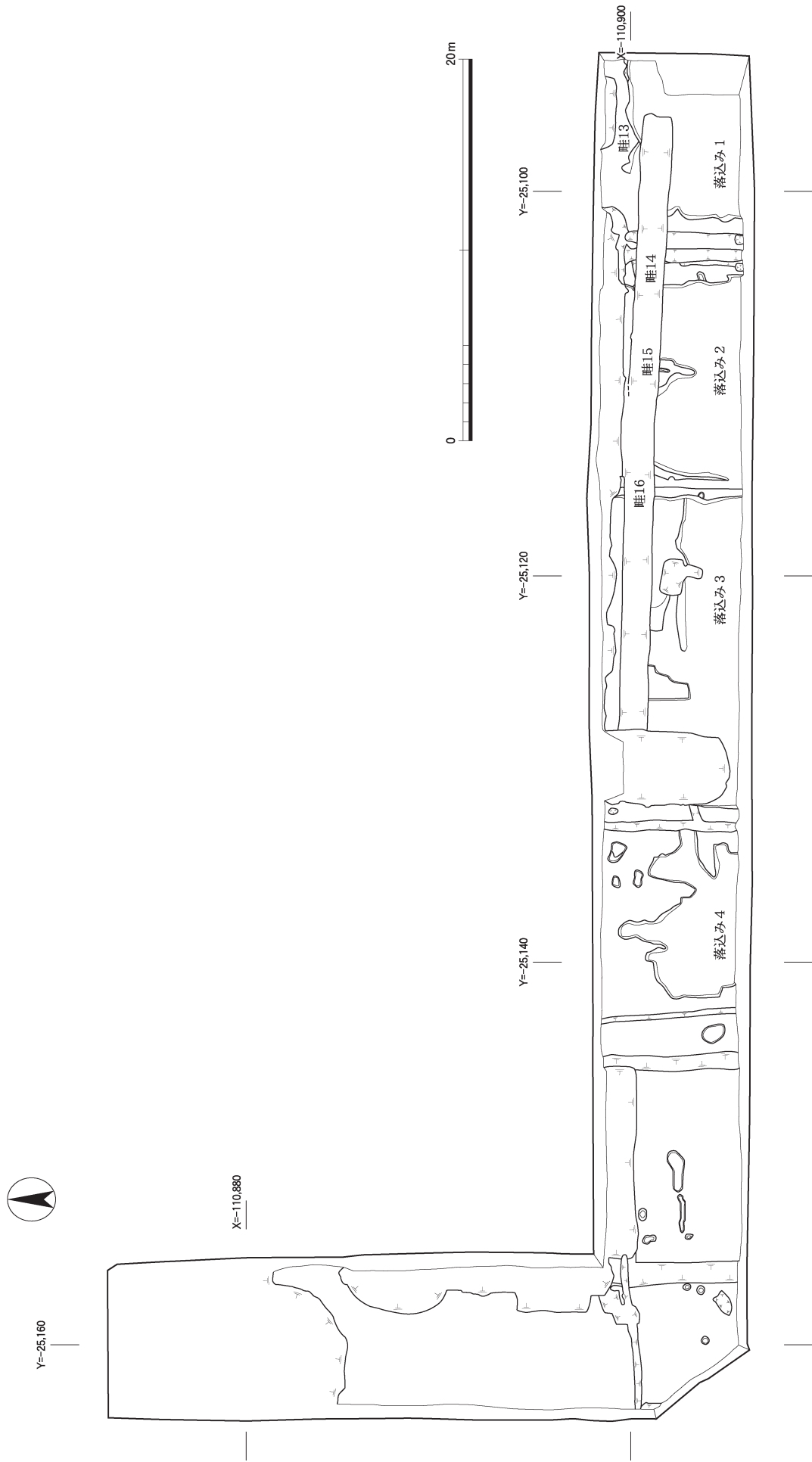


图 22 室町時代遺構平面図 (1 : 300)

4) 井戸

井戸 118 (図 21、図版 7-1) 調査区東辺で検出した、南北 1.5 m、東西 1.35 m の方形の掘形をもつ井戸である。井戸枠は失われているが、木製の井戸枠が存在したと思われる。深さは 0.85 m で、底面は南北 0.7 m、東西 0.8 m の方形で、拳大の礫が敷かれている。上部を土壌 171 に覆われ、東半を溝 92 に切られている。遺物は、土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器などが出土している。

5) 土壌

土壌 56 調査区東端で検出した。北西隅のみの検出であるため、全体の規模は不明である。深さは 0.3 m で、埋土は 2 層に分れ、上層は黒色シルト、下層は黒褐色シルトである。遺物は、土師器、須恵器、緑釉陶器などが出土している。

土壌 76 (図 21) 調査区東辺で検出した。南半部を溝 80 に切られている。深さは 0.2 m で、埋土は黒褐色粘砂質土である。遺物は、土師器、須恵器が出土している。

土壌 171 調査区東辺で検出した、不整形な落込みである。東を溝 92 に、南を溝 80 に切られている。深さは 0.2 m で、埋土は黒褐色粘質土である。調査区の中では低地にあたり、土を入れて平坦にした痕跡だと思われる。

(4) 鎌倉・室町時代の遺構 (図 22、図版 7-2)

1) 水田

調査区の南半部で検出した。北西から南東に傾斜する地形のため、標高の低い東半部での遺構検出となったが、西半部でも断面の観察によって耕作土の存在を確認した。北側を畦 13、西側を畦 14 で画された部分を落込み 1、畦 14 と畦 16 の間を落込み 2、東を畦 16 から西へ約 16 m までの落込み 3、落込み 3 の西側に位置する不整形な落込み 4 が水田遺構に相当する。落込み 1 では、耕作土は上から暗灰黄色粘質土、黒褐色粘砂質土、黒褐色粘質土の 3 層に分れる。落込み 2 では、耕作土は暗灰黄色粘質土、黒褐色粘砂質土の 2 層になり、畦 14 から約 3 m から前 2 者の土層を切った灰色粘質土、黒褐色粘質土の 2 層に変わって西端まで続く。畦を伴う耕作土の下層にもう 1 層耕作土と思われる層が堆積している。下層 (地山) を切り込んだ、耕作に関したと思われる小溝群を検出している。層の上下関係にかかわらず、平安時代末から室町時代の遺物が出土する。

2) 畑

断面の観察によって確認した (図 5)。西半の黒褐色粘質土の上面で、幅 0.4 ~ 0.75 m、深さ 0.07 ~ 0.09 m の溝が 1.0 ~ 1.5 m 間隔に検出した。畑の畝間の溝と考えられる。畦 14 から約 3 m の地点から始まり、落込み 4 の中央部付近で終わる。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要 (表3)

今回の調査で出土した遺物は、コンテナ総数で31箱となった。弥生時代から中世までの多岐にわたっている。弥生時代の遺物が遺構の割合に比べると非常に少ないが、完形になるものが多いのが特徴である。

弥生時代の遺物は、ほとんどが方形周溝墓の周溝から供献土器と考えられる弥生土器の甕や壺がほとんどであるが、個体数は少ない

古墳時代の遺物は、土墳墓などから須恵器の杯身、杯蓋、土師器の甕などが出土しているが量は極めて少ない。

平安時代の遺物は、主に井戸や条坊内溝から土師器の椀・皿・杯・高杯・甕、須恵器の甕・壺・杯・蓋・鉢、緑釉陶器の皿・鉢、灰釉陶器椀、黒色土器の椀、白磁、青磁、土馬などが出土している。

中世の遺物は、水田耕作土と考えられる落ち込みから多量の遺物が出土しており、土師器の皿、須恵器の甕、東播系須恵器の播鉢、焼締陶器の甕・播鉢、施釉陶器の皿・甕、輸入陶磁器、瓦器の椀・羽釜、瓦、漆椀、石製品、金属製品などが出土している。

(2) 弥生・古墳時代の土器 (図23～25、図版8・9)

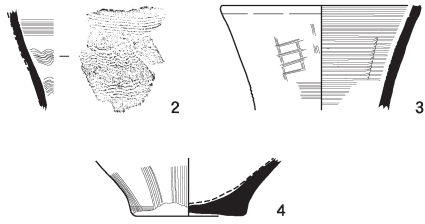
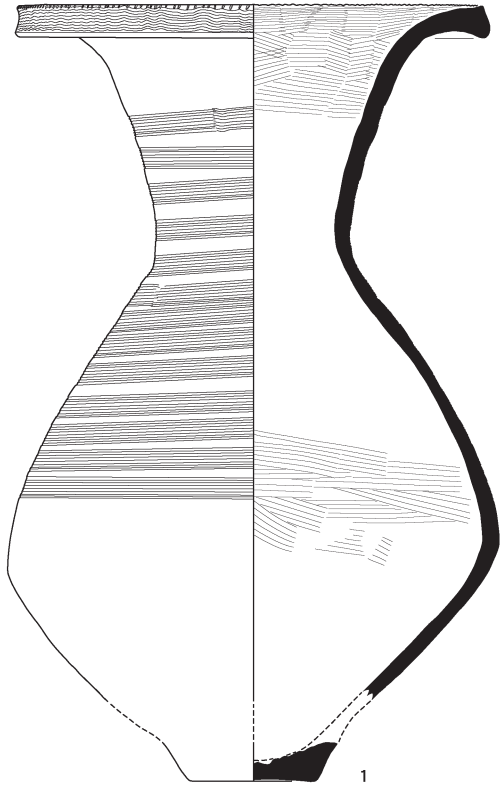
方形周溝墓1出土の土器(1～4)Ⅱ様式～Ⅲ様式の壺形土器などが出土している。1は広口長頸壺である。ほぼ完形に復元できる。外面頸部から胴部にかけてスガが付着する。装飾は、回転台を使用し口縁部を上下にわずかに拡張させて端面を形成し、櫛描波状文を施した後に、端部に刺突文を施す。頸部から胴部にかけては13条の櫛描直線文を施している。櫛描文は全て同一原体を使用している。成形技法では、口縁部から頸部の内面にかけて、粗い横ハケ目調整が見られる。

表3 遺物概要表

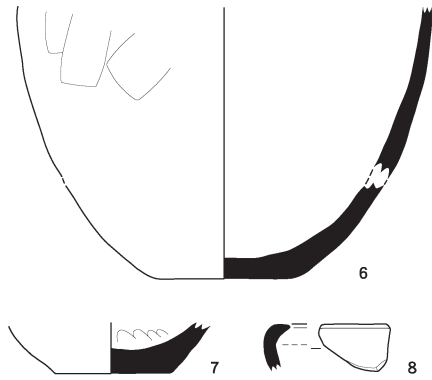
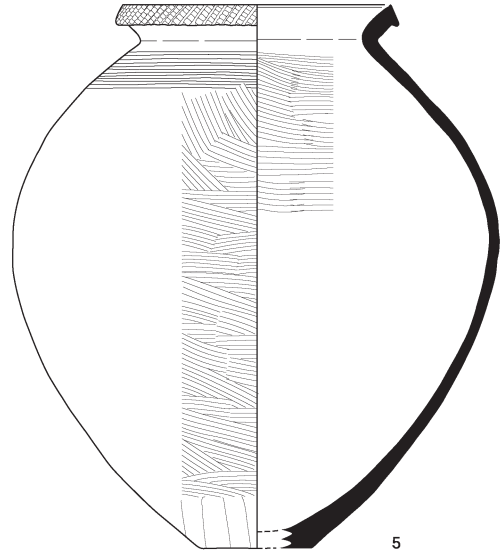
時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器、石鎌、剥片		弥生土器15点、石器2点		
古墳時代	土師器、須恵器		土師器1点、須恵器2点		
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入磁器、瓦、石製品		土師器16点、須恵器12点、黒色土器2点、緑釉陶器2点、灰釉陶器1点、石製品1点		
鎌倉・室町時代	土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、木製品、石製品、銭貨、金属製品		土師器8点、瓦器6点、施釉陶器7点、焼締陶器1点、輸入陶器1点、輸入磁器3点、石製品16点、銭貨1点、金属製品4点		
合 計		32箱	101点(6箱)	26箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

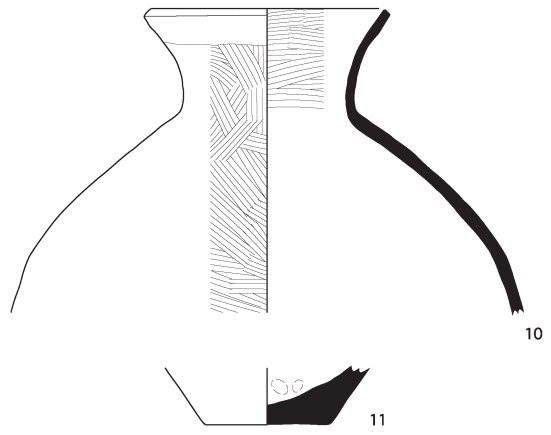
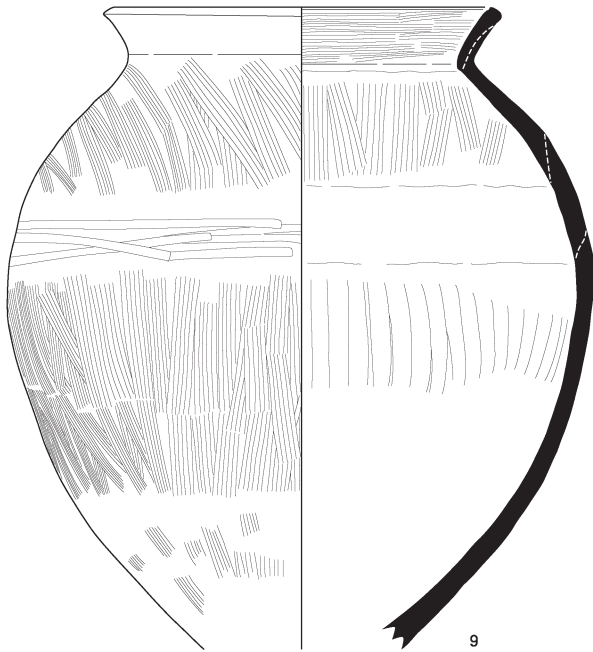
方形周溝墓 1



方形周溝墓 3



方形周溝墓 4



土坑 119

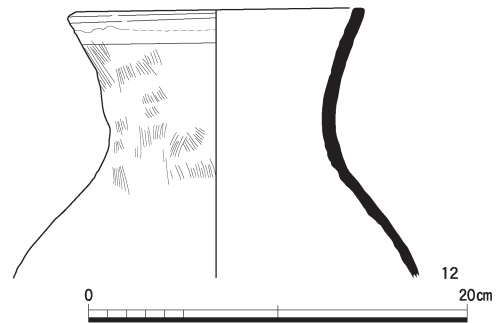


图 23 出土土器实测图 [弥生时代] 1 (1 : 4)

内面頸部から胴部にかけては剥離が進み、わかりにくい指押さえの痕跡がわずかに残る。胴部には横ハケ目調整が残る。外面は口縁部から頸部にかけて細かい縦ハケを施す。

2は壺の胴部で、外面は1条の櫛描直線文と2条の櫛描波状文を施す。全面にヘラミガキが見られる。内面は剥離が激しく、調整は不明である。

3は直口壺の口縁部である。口縁部端面は凹み、沈線を施す。内面全面に横ハケ。口縁部の内面は直線文施条後、横ナデが見られる。外面は頸部に櫛描直線文を施す。

4は壺の底部である。内面は剥離が進み、調整は不明である。外面は胴部下半から底部にかけて横ハケ後縦ハケを施し、底部端面は指押さえを施す。

方形周溝墓2出土の土器(13) 13はV様式後半の近江形の受け口口縁の甕である。口縁部外面に刺突列点文を施す。外面は頸部から胴部上半にかけて上から櫛描直線文、刺突列点文、櫛描波状文を施す。口縁部は内外面共に横ナデを施す。外面全体にナデを施す。内面はハケ後ナデを施す。内面下半と外面底部から胴部上半にかけてススが付着する。

方形周溝墓3出土の土器(5~8) III様式の壺形土器が出土している。5は広口短頸壺である。ほぼ完形に復元できた。口縁部は端部を上下にわずかに拡張し端面を作り、櫛描列点文を施している。外面は頸部から胴部上半にかけて横ハケを施す。横ハケより下部は斜めハケから横ハケが見え、底部付近は縦ヘラケズリを施す。内面は口縁部がナデ、頸部から胴部上半は斜めハケから横ハケが見える。胴部上半から底部にかけてナデが見える。

6は壺形土器の底部から胴部である。装飾はない。外面胴部上半はヘラケズリ、下半から底部はナデが見える。内面は全面ナデで仕上げられている。

7は壺形土器の底部である。装飾はない。外面は荒れていて調整は不明である。内面は指押さえで仕上げられている。

8は甕の口縁部である。装飾はなく、内外面ともに剥離が進み、調整は不明である。

方形周溝墓4出土の土器(9~11) IV様式の壺形土器や甕が出土している。9は甕である。底部は欠損しており、打ち欠いたと考えられる。頸部と胴部に粘土接合痕が見える。内面下半全体にススが付着する。口縁部は端部をわずかに上方に拡張し、端面をナデ、外面をナデ、内面は横ハケ後、ナデが見える。外面は頸部から胴部上半は縦ハケ、中半は横ヘラケズリ、下半は縦ハケを施す。内面は頸部から胴部上半にかけて縦ハケ胴部上半は縦ヘラケズリが見える。瀬戸内地方の影響を受けた甕と考える。

10は壺形土器である。装飾はない。外面は荒れていて調整は不明である。底部にススが付着する。内面は指押さえが見える。

11は短頸壺である。口縁部は端部に面を持ち、外面は横ナデ、内面は横ハケを施す。外面頸部から胴部にかけて縦ハケを施す。内面にはナデが見える。

土壙119出土の土器(12) IV様式の長頸壺の口縁部から胴部である。口縁部の端部には粘土張り付けが見える。口縁部の内外面は横ナデ、外面頸部から胴部は縦ハケが見える。内面は剥離が進んでいるものの、無調整である。

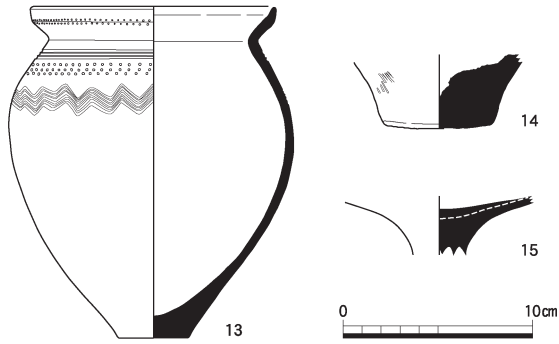


図 24 出土土器実測図 [弥生時代] 2 (1 : 4)

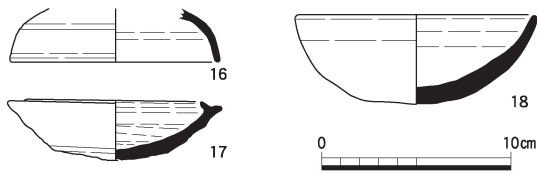


図 25 出土土器実測図 [古墳時代] (1 : 4)

る。飛鳥 I 期に比定する。

(3) 平安時代の土器 (図 26、図版 9)

柱穴 45 出土の土器 (27・28) 27 は須恵器の杯蓋である。天井部は平坦で、口縁部は屈曲し端部は下方へ突出する。回転ナデによる調整を施す。28 は須恵器の杯身である。低い断面台形の高台がつき、体部はほぼまっすぐに外上方にのび、口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ切りのまま無調整で、他は回転ナデによる調整を施す。

土壙 56 出土の土器 (19～26) 19・20 は平らな底部から、口縁が短く外上方にのびる土師器の皿である。口縁部、内面はナデ調整、底部はオサエである。

21・22 は土師器の椀である。体部・口縁部は外上方にのび、口縁端部は丸身をおびるもの (21) とつまみ上げるもの (22) がある。口縁部、内面はナデ調整、底部はオサエである。

23 は土師器の甕である。体部から口縁部に「く」の字形に屈曲し、口縁端部は上方につまみあげる、口縁端部外方に 1 条の沈線がめぐる。表面の磨滅が激しく、詳細な調整は不明である。

24 は須恵器の壺の口頸部である。口縁端部は上下に引き出され、外方に面をもつ。回転ナデによる調整を施す。

25・26 は緑釉陶器の皿である。中央がもちあがった円盤状の底部をもち、口縁部は外反し端部は丸味をおびる。25 は底部外面から口縁部は回転を利用したヘラケズリ、内底面は一方向のヘラケズリ、他はナデによる調整を施す。26 は底部外面から体部下半をヘラケズリし、他はナデによる調整を施す。体部上半・口縁部の外面にミガキを施す。

土壙 76 出土の土器 (45・46) 45 は土師器の皿である。平らな底部から、口縁が短く外上方に

その他遺構出土の土器 (14・15) 14 は遺構検出中に出土したもので、壺形土器の底部である。内外面ともに荒れて調整は不明である。15 は溝 196 から出土した高杯の頸部である。頸と脚部の境に粘土接合痕が見える。内外面ともにナデを施す。

溝 19 出土の土器 (16) 18 は須恵器蓋である。内面横ナデ、外面横ナデ、天井部ヘラケズリを施す。高杯蓋の可能性もある。

土壙 36 出土の土器 (17) 16 は須恵器の杯身である。内外面ともに横ナデで、内面底部に仕上げナデを施す。底部外面はヘラ切り。TK217 型式に比定する。

土壙 249 出土の土器 (18) 17 は土師器杯である。内外面ともに荒れて調整は不明である。

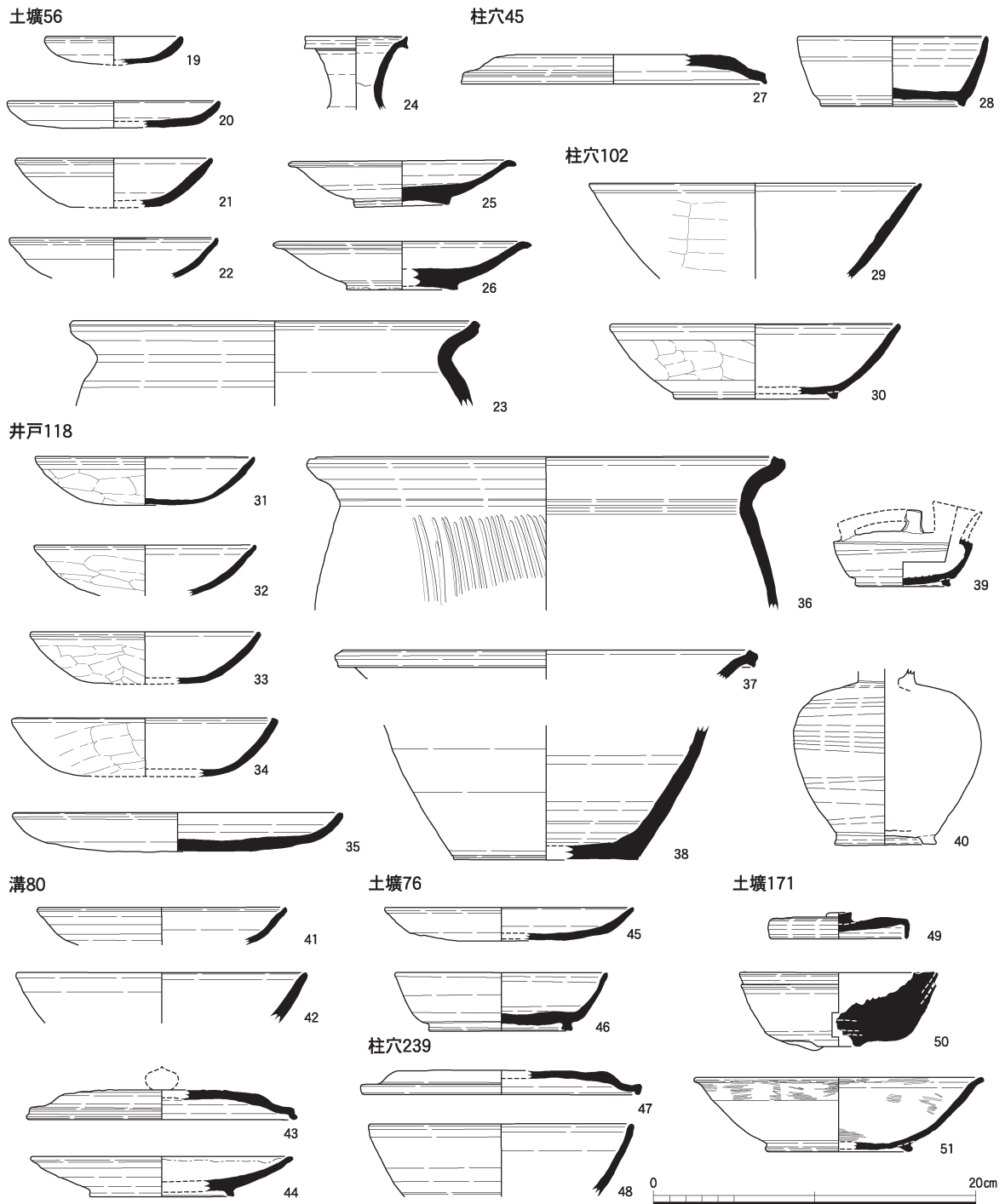


図 26 出土土器実測図 [平安時代] (1 : 4)

のびる。口縁部、内面はナデ調整、底部はオサエである。

46 は須恵器の杯身である。低い断面台形の高台が付き、体部はほぼまっすぐに外上方にのび、口縁端部は丸くおさめる。底部はヘラ切りのまま無調整、他は回転ナデによる調整を施す。

溝 80 出土の土器 (41 ~ 44) 41 は土師器の皿である。体部・口縁部は外上方にのび、端部は内部に肥厚する。口縁の一部にナデが残るが外面はヘラケズリ、内面はナデ調整を施す。

42 は黒色土器の A タイプの椀である。口縁端部は丸味をおびる。口縁部・内面にヘラミガキを施し、内面に暗文が認められる。

43 は須恵器の杯蓋である。天井部は平坦で、口縁部は屈曲し端部は外方へつまみ出す。天井部外面はヘラケズリ、他は回転ナデによる調整を施す。

44 は灰釉陶器の皿で、内面のみに施釉されている。底部に断面台形の高台が付き、体部は低く外方にのび、口縁部は外面に強いヨコナデが加えられ端部は外方へつまみ出す。体部外面はヘラケズリ、他はナデによる調整を施す。

柱穴 102 出土の土器 (29・30) とともに土師器の台付きの杯である。平坦な底部に断面台形の高台が付き、体部と口縁部は外上方にのび、口縁端部は、29 は上部に、30 は内側にわずかに肥厚する。外面はヘラケズリ、内面はナデ調整を施す。

井戸 118 出土の土器 (31～40) 31～33 は土師器の椀である。体部・口縁部は外上方にのび、口縁端部内部にわずかに肥厚する。外面はヘラケズリ、内面はナデ調整を施す。

34 は土師器の杯である。体部・口縁部は外上方にのび、口縁端部内部にわずかに肥厚する。外面はヘラケズリ、内面はナデ調整を施す。

35 は土師器の皿である。平らな底部から、口縁が短く外上方にのび、口縁端部は丸味をおびる。口縁部、内面はナデ調整、底部はオサエである。

36 は土師器の甕である。体部から口縁部に「く」の字形に屈曲し、口縁端部は上方につまみあげる。体部外面は縦方向のハケメ、口縁内部は横方向のハケメ調整を施す。体部内面はナデ調整を施す。

37 は須恵器の甕である。口縁端部は外傾する面をもち、上下端が突出する。回転ナデによる調整を施す。

38・40 は須恵器の壺である。38 は平坦な底部から体部から外上方にのびる。底部外面は糸切りのまま無調整、他は回転ナデによる調整を施す。40 は底部に断面台形の高台が付き、体部は卵形を呈する。底部は糸切り痕を残す。他は回転ナデによる調整を施す。

39 は須恵器の平瓶である。底部に断面台形の高台が付く。体部は偏平で、体部上面と胴部との間に凹線をめぐらす。底部は回転を利用したヘラケズリ、他は回転ナデによる調整を施す。体部上面に緑灰色の自然釉がかかる。

土壙 171 出土の土器 (49～51) 49 は須恵器の壺の蓋である。天井部中央に偏平なつまみが付き、天井部から口縁部へ直角に屈曲する。天井部中央はヘラキリのまま無調整、他は回転ナデによる調整を施す。

50 は須恵器の杯身 2 個体と壺の底部が溶着したものである。

51 は黒色土器 A タイプの椀である。平坦な底部に台形の高台が付き、体部・口縁部は外上方にのび、口縁端部はわずかに外傾し丸味をおびる。磨滅が激しくて詳細な観察はできないが、所々にヘラミガキがみられる。

(4) 鎌倉・室町時代の土器 (図 27、図版 9)

落込み 1 出土の土器 (52～60) 52～55 は土師器の皿である。52 は体部・口縁部が屈曲して

外反する。外面は口縁部に粗いナデが見られ、内面は体部・口縁部はナデ調整、体部下半に指頭痕がのこる。53～55は、平らな底から外反しながら立ち上がる体部・口縁部からなる。口縁部・体部内面はナデ調整を施す。55は高火度の二次焼成を受けて須恵器化し、内面には金属の溶解物が付着している。取瓶として使用されたものと考えられる。

56・58・60は瓦器である。56は、平坦な底部から口縁部が内側に折り曲げられた皿である。ナデによる調整を施す。58は、口縁部が内側に突出した火舎である。60は、羽釜である。口縁部と体部の境に鏝が付く。口縁部は内傾し端部は平坦である。ナデによる調整を施す。

57・59は輸入陶磁器である。57は青白磁の合子の身、59は泉州窯系の緑釉陶器の盤である。

落込み2出土の土器(61～67) 61～63は土師器の皿である。61・62は底部が内側に突出したいわゆる「ヘソ皿」である。口縁端部内面は浅く凹む。体部・口縁部はナデ調整を施す。63は平らな底から外反しながら立ち上がる体部・口縁部からなる。口縁部・体部内面はナデ調整を施す。

64・65は、美濃・瀬戸系の施釉陶器の皿である。64は体部・口縁部は外湾気味に上方にのび、端部は丸味を帯びる。内面と口縁端部に緑灰色の釉がかかる。65は口縁部が外反気味に上方にのび、端部は外傾する面をつくる。内底面に挿目をもつ。淡緑灰色の釉が全体にかかる。

66は輸入青磁の椀である。体部・口縁部は湾曲しながら外上方にのび、口縁端部は外方につまみ出され丸味をおびる。

67は瓦質の鍋である。口縁部は外方に折れ曲がり、端部は外傾する面をつくる。ナデによる調

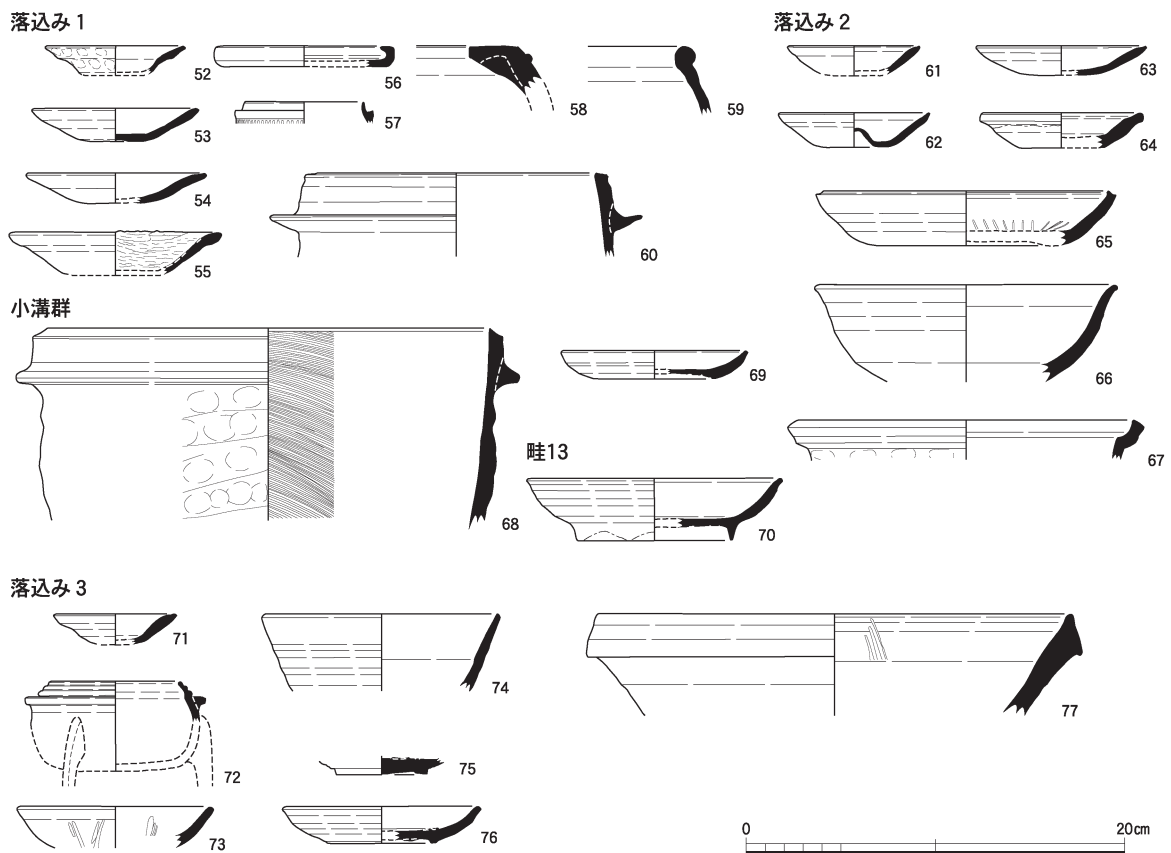


図27 出土土器実測図〔鎌倉・室町時代〕(1:4)

整を施す。

落込み3出土の土器(71～77) 71は平らな底から外反しなが立ち上がる体部・口縁部からなり、口縁端部内面は浅く凹む。いわゆる「ヘソ皿」になると思われる。口縁部・体部内面はナデ調整を施す。

72は瓦質の小型の羽釜である。三脚が付くと思われる。口縁部と体部の境に鐳が付く。口縁部は内傾し端部は平坦である。ナデによる調整を施す。

73は輸入青磁の皿である。体部・口縁部は湾曲しながら外上方にのび、口縁端部は丸味をおびる。

74～76は美濃・瀬戸系の施釉陶器である。74・75は椀である。74は体部・口縁部は上方にのび、口縁端部は丸味を帯びる。緑灰色の釉がかかる。75は椀の高台部分で底部は糸切りの後内部を削って高台を作っている。内底面にトチンの跡が残る。内面に褐色の釉がかかる。76は、底部に低く偏平な高台が付く皿である。体部・口縁部は上方に短くのび、口縁端部は丸味をおびる。底部の内外面ともに重ね焼の痕跡がみられる。内底面の無釉であるが、他は緑灰色の釉がかかる。

77は備前焼の播鉢である。内面に播目がある。

小溝群出土の土器(68・69) 68は瓦質の羽釜である。口縁部は鐳部から短く立ち上がり、端部は外傾する面をつくる。口縁部は指ナデ、内面は布状のものを用いたナデを施す。

69は瀬戸・美濃系の皿である。底部外面を浅くケズリ出している。底部外面にトチンの跡が残る。全体に淡緑灰色の釉がかかる。

畦13出土の土器(70) 輸入青磁の椀である。細くて高い高台が付く。体部・口縁部は低く外上方にのび、口縁端部は若干外傾する。

(5) 石器・石製品(図28・29)

鎌倉・室町時代の水田跡と考える落込みから石帯未製品、砥石が出土している。また、石鏃や剥片も出土している。

78は打製石鏃で、木辻大路内側溝から出土した。石材はチャートである。両面加工が施されているが、先端は欠けている。

79は縦長剥片である。石材はサヌカイトである。

80は井戸118から出土した砥石である。材質は頁岩である。

81～84は石帯の未製品であり、材質は緑がかった凝灰岩である。85も石帯の未製品と考えられ、材質は石英である。片面が平らに磨かれている。

86～96は砥石で、材質はけい質頁岩である。

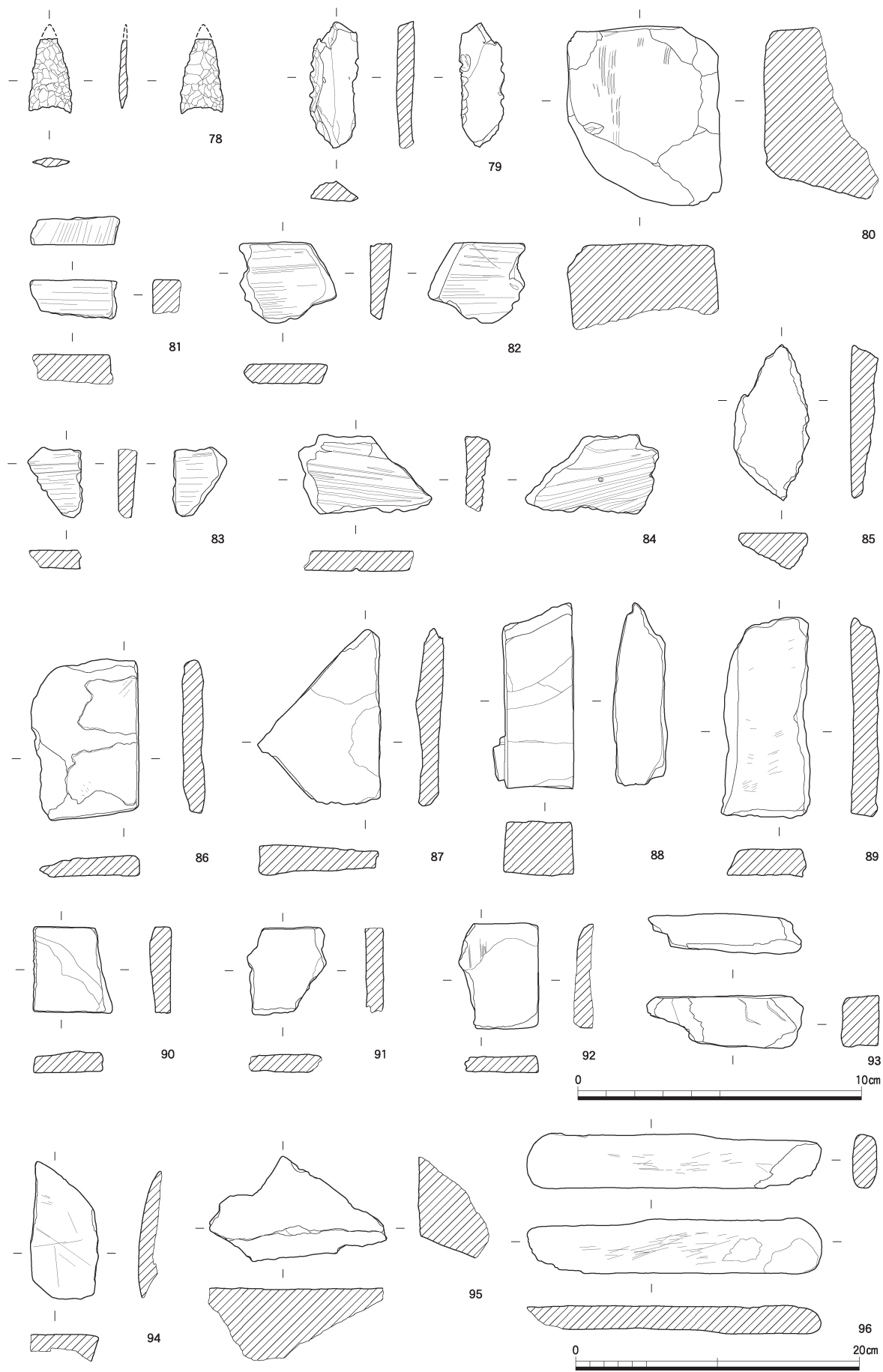


图 28 石器·石製品実測図 (1:2、1:4)

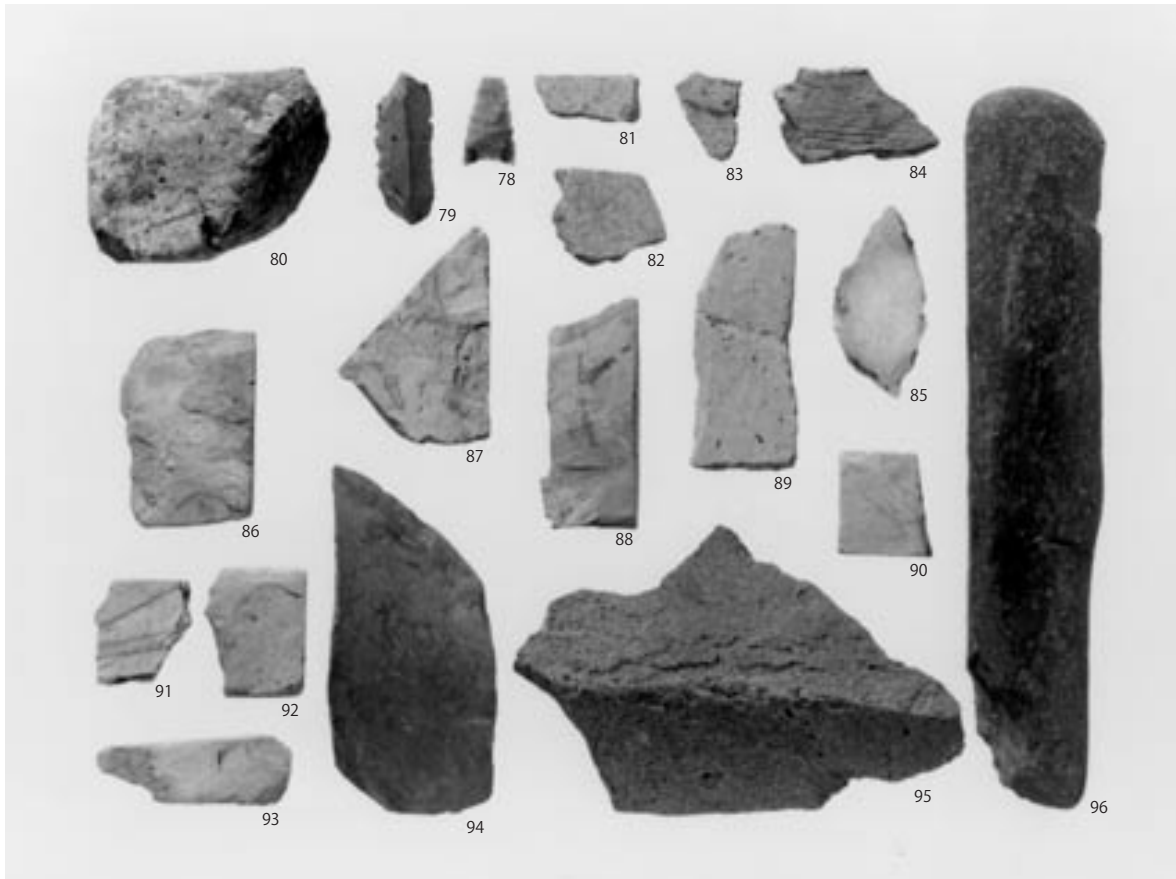


図 29 石器・石製品

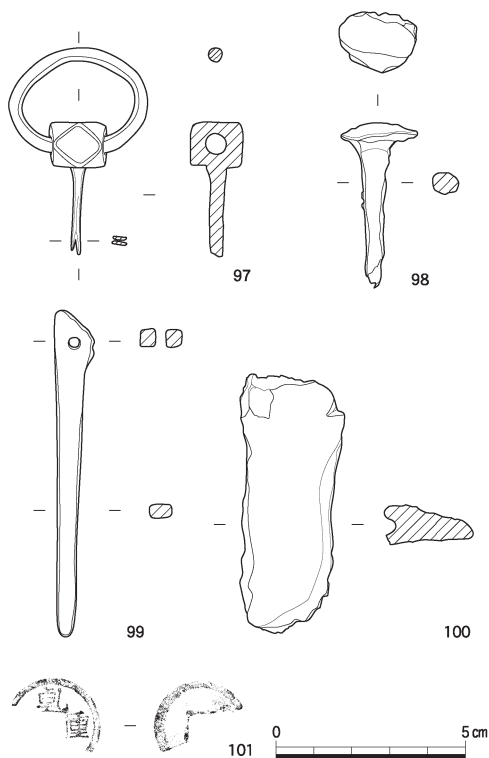


図 30 金属製品実測図・銭貨拓影（1：2）

(6) 金属製品（図 30、図版 9）

鎌倉・室町時代の水田や畦畔から出土した。

97 は、調度品の金具と考える。銅に金メッキが施されている。

98 は鉄釘である。

99 は銅製品であるが、用途は不明である。

100 は鋤先である。木製の鋤に鉄製の刃部を装着するものである。

101 は中国銭で、「軋元重寶」。唐代のもので初鑄年は 758 年である。

5. まとめ

今回の発掘調査では、弥生時代から室町時代までの遺構を確認した。しかし、遺構は連綿と続いているものではなく、弥生時代中期から後期、古墳時代後期、平安時代前期、鎌倉時代から室町時代の画期がある。古墳時代については、遺構、遺物ともにわずかししか認められなかった。以下、時代ごとの成果と課題を示す。

鎌倉時代から室町時代

先述したように、調査地は平安時代中期以降水田・畑として利用されていた。これまでの調査で、平安京の右京域、特に南部では低湿地が多く、平安時代中期には多くの場所が湿地化し、居住の痕跡が見られないことが、周辺の発掘調査で判明している。今回の調査でも、平安時代の遺構は前期しか認められず、これまでの調査を裏付ける結果となった。しかし、中世の水田・畑の埋土から、石帯の未製品や仕上げ砥石、鉄滓や坩堝などの鑄造関連遺物がまとまって出土したことは、付近に工房の存在を推定でき、右京域の土地利用の新たな一面を示す。

平安時代

今回の調査区は、十四町の宅地内でも築地に近接しているが、建物、柵列、井戸、排水施設を検出した。出土遺物から前期に収まるものである。建物遺構は、部分的な検出にとどまったが、重複が認められることから、少なくとも2時期の変遷があることがわかる。建物配置では、建物2は西側に庇を持つ南北棟の掘立柱建物で、西庇柱列は、十四町を東西にわける中軸線とほぼ重なることから、宅地内で重要な建物であった可能性が高い。また、柵列6は宅地の東三行と東四行との境にほぼ重なることから、十四町内の宅地を区分するものであったと考えられるが、部分的な検出のため、詳細は不明である。

弥生時代

弥生時代については、中期前半から後期後半にかけての方形周溝墓を計6基確認した。しかし、平安京造営時に整地が行われたと考えられ、検出した全ての方形周溝墓の墳丘は削平され残っていなかった。また、方形周溝墓に伴う埋葬施設も確認できず、可能性のある土壌からも遺物は認められなかった。

6基の方形周溝墓は、中期（方形周溝墓1・3・4）、後期（方形周溝墓2・5?）、不明（方形周溝墓6）のものがある。しかし、中期においても周溝墓1と3・4の間には違いがある。1は周溝も深く、丁寧に作られていることから、単独を意識して築かれた可能性が高いが、3・4はわずかに周溝に重複関係が見られるが、方位を同じくしており、共有を意識して築かれたと考えられる。単独で築かれた周溝墓1と共有を意識して築かれた周溝墓3・4との間には、被葬者の階層差を想定できるが、先述したように墳丘の削平に伴い埋葬施設が確認できなかったことから、階層差に言及することは難しい。後期の周溝墓2についても一辺約19mの規模を持つが、埋葬施設である可能性のある土壌174からも遺物は認められなかったことから、被葬者像について言及することは難しい。しかし、畿内では後期に方形周溝墓の数が激減する一方、規模が拡大することが指摘されており、理由として階層差が強まったということが挙げられている¹⁾。

一方で周溝からは、供献土器と考えられる遺物が存在する周溝墓があるが、各々の出土状況を見ると、違いがあることがわかる。供献土器の出土状況については、藤井整氏が下植野南遺跡の例から墳丘上、周溝内に立て並べる「供献」、周溝底に置き去りにする「遺棄」、破片を周溝に投げ込む「投棄」という3つを区別する必要があるとしている²⁾。供献土器が出土した周溝墓は周溝墓1・2・3・4である。それぞれの出土状況を検討すると、1・2は「供献」、3は「遺棄」、4は「投棄」であるといえる。これら3つの出土状況は葬送儀礼と密接に関わるものとして注目できる。

西京極遺跡の広がりについて

今回の調査で確認できた方形周溝墓群から、当調査地周辺は墓域の可能性が高い。ではこれらの周溝墓に埋葬されていた構成員の居住域はどこにあるのだろうか。先述したように、当調査地は、弥生時代の遺跡の空白地ではあるが、北には弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物散布地である山之内遺跡、南東には弥生時代から奈良時代の遺跡とされる西院遺跡、南西には弥生時代から奈良時代の集落跡である西京極遺跡が存在する。このうち、山之内遺跡、西院遺跡では、これ



図 31 平安京直前の京都盆地地形図（1：60,000）

まで弥生時代の明確な居住の痕跡が認められていない。一方、西京極遺跡からは、中期以降多数の竪穴住居や環濠と考えられる溝が見つかっており地域の拠点的な集落跡と目されている。以上のことから、方形周溝墓群に葬られていた人々の居住域は西京極遺跡にあると考えられる。そこで今回、調査地周辺の旧地形を復元し、西京極遺跡の広がりを再考してみたい。

西京極遺跡を含む調査地周辺域は、昭和 30 年頃まで水田が広がっており、都市化されたのは近年である。現在では平坦な地形が広がっているように見えるが、これは耕作地を広げるために平坦な場所を作り出したことと、河川による土砂運搬能力のためであ

る。

京都盆地が現在の形になったのは最終氷期である。約 40,000 年から 35,000 年前の寒冷期に山間部の礫が平野部に大量に流れ出した。各地に見られる扇状地はこの時に形成されたものであり、調査地が位置する御室川の扇状地もそのうちの一つである。さらに約 18,000 年から約 6,000 年前の間に、急激に暖かくなったことで海面の上昇を引き起こし、河川は緩やかになった。同時に河川の土砂運搬能力も衰え、扇状地上の谷を砂や礫で埋めることになり、扇状地を削り込んだ谷の中に小規模な扇状地が新たに形成された。先端の扇状地の外側に後背湿地が広がっていったのが、当調査地周辺の旧地形の概観である（図 31）³⁾。

調査地周辺では、これまで多くの立会・試掘・発掘調査が行われ（表 1）、地質の成果の蓄積がある。参考にした成果は、湿地状の堆積や地山と考えられる層を確認することができたものか、遺構の確認ができたものに限った。盛土や耕作土しか確認できなかったものについては省いた。また範囲についても、調査区より北側では弥生時代の明確な遺構を確認していないことから、平安京の条坊でいえば南側の五条三坊六・七・十一～十四町、四坊三～六・十一・十二町、六条三坊五～十六町、四坊一～十二町に限った（図 4）。

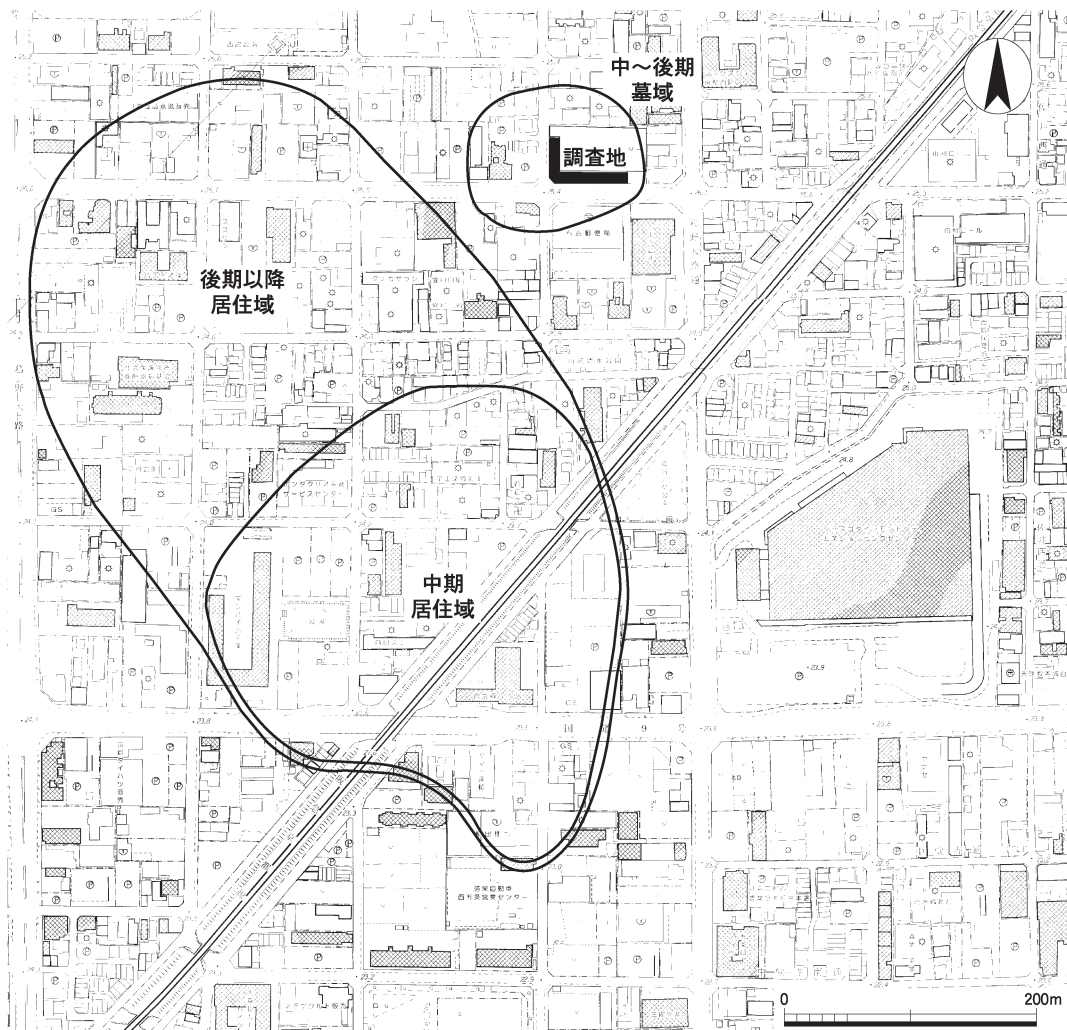


図 32 調査地周辺の旧地形復元図（1：6,000）

西京極遺跡の広がりや旧地形については、これまでも言及されている。西京極遺跡は、1978年に西院月双町の発掘調査⁴⁾によって弥生時代の遺物が大量に出土したことで周知されたものであるが、同年に行われた下水道工事に伴う立会調査で、弥生土器を含む茶灰色粘土層が国道9号線と阪急電車の交差点を中心に東西0.25 km、南北0.15 kmにわたって広がっているとした⁵⁾。また、六条四坊二町跡の調査では、弥生時代中期から後期にかけての住居跡を検出しており、報告者は遺跡の範囲を東西0.4 km、南北1 kmとしている⁶⁾。近年では、六条三坊七町跡の調査⁷⁾で、遺跡の立地を旧天神川と旧島津製作所五条工場跡（現ジャスコダイヤモンドシティ五条ショッピングセンター）で確認された、縄文時代から古墳時代にかけての旧河川⁸⁾に挟まれた微高地上に営まれた集落としている。また、右京六条四坊三町跡の立会調査の報告⁹⁾では、周辺の立会・試掘・発掘調査を元に、湿地の範囲を提示されている。

今回、旧地形の復元で注目したのが黄褐色砂泥や褐色砂泥と呼ばれる微高地上に堆積したシルト質の地層である。この層は西京極遺跡一帯にみられる地山で、弥生時代以降の遺跡が成立する面である。このシルト層をこれまでの調査成果から追っていく。さらに、湿地状堆積や流路跡が確認できる場所を追っていくことで、調査地周辺の微高地、低湿地の分布状況を把握することができる。その上で、これまでの調査成果を加えることによって、当調査地を含めた西京極遺跡周辺の性格が浮かんでくると考えた（図32）。

まず、南側は湿地状堆積が広がっており、六条三坊七町の調査で見つかった旧河川と合流し、南側一帯は広大な湿地(沼?)が広がっていた。また湿地に流れ込む北からの小流路がいくつかあったことがわかる。

シルト層の広がり、この湿地に面して北側に広がっている。この場所に中期には環濠とされる溝や竪穴住居が存在し、後期にも多数の竪穴住居の存在が確認されていることから、西京極遺跡の中心部といえる。中心部である居住域の広がり、南限が広大な湿地まで、西限は山小路付近を南北に流れる流路、東限は恵止利小路付近を北東から南西に流れる流路までと考えられる。北限は、当調査地で見つかった方形周溝墓群との間にあると思われ、五条大路付近を南西に向かって流れる流路が、あるいは居住域と墓域を区画するための境であったと考えられる。また方形周溝墓群とこの流路方位がほぼ同じであることから、自然地形を利用して方位を決めた可能性もある。

また、当調査地の流路を挟んだ西側の五条四坊十二町跡の発掘調査でも、方形周溝墓2基が確認されているが、重複関係にある竪穴住居6棟も、弥生時代後期のものしか確認されていないことから、この場所は後期に入ってから開発、発展したと考えられる。

上記をまとめると、弥生時代中期には西京極遺跡は、居住域が東西約0.3 km、南北0.3 kmに及び、さらに流路を挟んで北側に墓域を形成していた。そして、後期にはいり既存の居住域の北西側に新たに居住域、墓域を広げていったと考えられる。ここで問題になるのが、弥生時代の集落に欠かすことのできない生産域が西京極遺跡では未だ確認されていないことである。しかし、周辺には水が豊富に存在し、容易に利用できる状況であったと考えられることから、存在していたと思

われる。

今回、方形周溝墓群を確認したことによって、西京極遺跡の性格を深めることができたと思う。しかし、調査面積は限られており、墓域の広がりや生産域、周辺の弥生遺跡との繋がりなど不明な点もまだまだ残されている。今後の調査研究に期待したい。

註

- 1) 伊藤淳史「弥生時代墓制の展開—山城地域を中心として—」『弥生時代の墳墓と祭祀』京都府埋蔵文化財研究会 2003年
- 2) 藤井 整「下植野南遺跡」『京都府遺跡調査報告書第35冊』（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004年
- 3) 横山卓雄「京都盆地の自然環境」『平安京提要』角川書店 1994年
- 4) 『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1982年
- 5) 丸川義広『西部幹線公共下水道工事に伴う遺跡調査概要 1978年度』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1979年
- 6) 上村和直・西大條 哲「平安京右京六条四坊・西京極遺跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 7) 堀内明博「平安京右京六条四坊七町発掘調査終了報告書」（財）古代学協会 2005年
- 8) 堀内明博ほか「平安京右京六条三坊」『平安京研究調査報告第20輯』（財）古代学協会 2005年
- 9) 吉本健吾「平安京六条四坊三町・西京極遺跡」『京都市内遺跡立会調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006年

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうごじょうさんぼうじゅうよんちょうあと							
書名	平安京右京五条三坊十四町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2006-7							
編著者名	木下保明・西森正晃							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2006年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょう 平安京右京 ごじょうさんぼう 五条三坊 じゅうよんちょうあと 十四町跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 さいいんひでりちょう 西院日照町 112番	26100		35度 00分 00秒	135度 43分 29秒	2006年4月 3日～2006 年6月16日	768㎡	マンション 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京右京 五条三坊 十四町跡	都城跡	弥生時代	方形周溝墓、溝、 土壇	弥生土器、石鏃、剥片				
		古墳時代	建物、土壇	土師器、須恵器				
		平安時代	建物、柵、溝、井 戸、土壇	土師器、須恵器、黒色 土器、緑釉陶器、灰釉 陶器、輸入磁器、瓦、 石製品				
		鎌倉時代 ～室町時代	落込み、畦	土師器、瓦器、施釉陶 器、焼締陶器、輸入陶 磁器、木製品、石製品、 銭貨、金属製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-7
平安京右京五条三坊十四町跡

発行日 2006年8月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
住所 〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961